

60分でわかる旧約聖書(20) 「箴言」

1. はじめに

(1) どの文化でも、箴言と呼ばれるものは存在する。

①箴言、格言、ことわざ、などなど。

②日本では、いろは47文字に対応した「いろはかるた」が最も有名である。

*犬も歩けば棒に当たる(江戸)

*一寸先は闇(上方)

*一を聞いて十を知る(尾張)

(2) 箴言について知っておくべきこと

①タイトル:ヘブル語で「マシャール」(似たような、比較するという動詞から出た言葉であろう)

②契約の民イスラエルは、モーセの律法や預言者のことばに忠実に歩むように命じられた。

③箴言は、律法の実践であり、日常生活の指針である。

*死後の世界に関する教えは皆無である。

④箴言は、今日の私たちにも大いに参考になる。

⑤箴言は、特に若者を意識して書かれている。

*若者がここから教訓を学べば、先人の失敗を繰り返すことがなくなる。

*箴言の目的は、わきまのない者に分別を与えることである(1:1~7)

⑥箴言には、完ぺきな真理と、例外を含んだ真理とが含まれる。

Pro 18:10 【主】の名は堅固なやぐら。／正しい者はその中に走って行って安全である。

Pro 17:17 友はどんなときにも愛するものだ。／兄弟は苦しみを分け合うために生まれる。

⑦テーマ聖句は、箴9:10である。

Pro 9:10 【主】を恐れることは知恵の初め、／聖なる方を知ることは悟りである。

(3) 著者

①ソロモン(1:1)

*三千の箴言の中から数百のものが選ばれた(1列4:32)

②マサの人ヤケの子アグル(30:1)

③マサの王レムエル(31:1)

(4) 宛先

①「わが子よ」「私の子よ」

②師から弟子に向けた言葉である。

③さまざまな状況の中で語られた箴言が、一冊の書にまとめられた。

(5) 執筆年代

①ソロモンの時代 前900年ごろ

②ヒゼキヤの時代 前700年ごろ

Pro 25:1 次もまたソロモンの箴言であり、ユダの王ヒゼキヤの人々書き写したものである。

2. メッセージのアウトライン

(1) 箴言の8区分

(2) 箴言の文学形式

(3) 箴言の具体例

3. 結論：義人化された知恵

箴言から知恵を学ぶ。

I. 箴言の8区分

1. 前書き(1:1~7)

2. 知恵の価値についてのソロモンのことば(1:8~9:18)

3. ソロモンの箴言(10:1~22:16)

4. 知恵のある者のことば(22:17~24:34)

5. ヒゼキヤの家来が編集したソロモンのことば(25~29章)

6. アグルのことば(30章)

7. レムエルのことば(31:1~9)

8. 高貴な妻(31:10~31)

II. 箴言の文学形式

1. 詩の形式

(1) 箴言全体が、詩の形式で書かれている。

①ヘブルの詩の特徴は、対句法である。

②通常は、2行目の方が大きな役割を果たす。

2. 5種類の対句法

(1) 単純な対句法

①2つの行がつながり、ひとつのことを伝える。

(2) 同義的対句法

①最初の行で、ひとつの考え方が紹介される。

②次の行で、同じ考え方が述べられる。

③2つの行が完全に一致しない場合は、不完全な同義的対句法と呼ぶ。

(3) 対照的対句法

①最初の行と次の行が、正反対のことを述べる。

②最初の行と次の行が、対比関係にある。

(4) 象徴的対句法

①最初の行の内容を、次の行が比喩を用いて説明する。

(5) 統合的対句法

①最初の行の内容を、次の行がより詳しく解説する。

②あるいは、最初の行の結果を次の行が紹介する。

③通常は、次の行の方が詳細な情報を紹介している。

3. 例外的な対句法

(1) 3行の箴言

Pro 6:17 高ぶる目、／偽りの舌、／罪のない者の血を流す手、

(2) 4行の箴言

Pro 30:9 私が食べ飽きて、あなたを否み、／「【主】とはだれだ」と言わないために。／
また、私が貧しくて、盗みをし、／私の神の御名を汚すことのないために。

(3) 6行の箴言(唯一)

Pro 30:4 だれが天に上り、また降りて来ただろうか。／だれが風をたなごころに集めただ
ろうか。／だれが水を衣のうちに包んだらろうか。／だれが地のすべての限界を堅く定めた
らうか。／その名は何か、その子の名は何か。／あなたは確かに知っている。

Ⅲ. 箴言の具体例

1. 【主】に関して

Pro 10:22 【主】の祝福そのものが人を富ませ、／人の苦勞は何もそれに加えない。(統合的)

Pro 3:19 【主】は知恵をもって地の基を定め、／英知をもって天を堅く立てられた。

Pro 3:20 深淵はその知識によって張り裂け、／雲は露を注ぐ。(同義的)

Pro 1:7 【主】を恐れることは知識の初めである。／愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。(対照的)

Pro 15:3 【主】の御目はどこにでもあり、／悪人と善人とを見張っている。(統合的)

2. 親子関係

Pro 13:24 むちを控える者はその子を憎む者である。／子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。(対照的)

Pro 1:8 わが子よ。あなたの父の訓戒に聞き従え。／あなたの母の教を捨ててはならない。(同義的)

Pro 1:9 それらは、あなたの頭の美しい花輪、／あなたの首飾りである。(同義的)

3. 言葉

Pro 15:23 良い返事をする人には喜びがあり、／時宜にかなったことばは、いかにも美しい。(統合的)

Pro 25:23 北風は大雨を起こし、／陰口をきく舌は人を怒らす。(象徴的)

Pro 27:14 朝早くから、大声で友人を祝福すると、／かえってのろいとみなされる。(対照的)

Pro 15:1 柔らかな答えは憤りを静める。／しかし激しいことばは怒りを引き起こす。(対照的)

Pro 14:3 愚か者の口には誇りの若枝がある。／知恵のある者のくちびるは身を守る。(対照的)

4. 土地

Pro 22:28 あなたの先祖が立てた昔からの地境を／移してはならない。(単純)

Pro 23:10 昔からの地境を移してはならない。／みなしごの畑に入り込んではいない。

Pro 23:11 彼らの贖い主は力強く、／あなたに対する彼らの訴えを弁護されるからだ。(総合的)

5. 貸借

Pro 22:7 富む者は貧しい者を支配する。／借りる者は貸す者のしもべとなる。(同義的)

6. 勤勉

Pro 21:5 勤勉な人の計画は利益をもたらし、／すべてあわてる者は欠損を招くだけだ。(対照的)

Pro 10:4 無精者の手は人を貧乏にし、／勤勉な者の手は人を富ます。

Pro 10:5 夏のうちに集める者は思慮深い子であり、／刈り入れ時に眠る者は恥知らずの子である。(対照的)

7. 敵

Pro 16:7 【主】は、人の行いを喜ぶとき、／その人の敵をも、その人と和らがせる。(単純)

Pro 25:21 もしあなたを憎む者が飢えているなら、／パンを食べさせ、／渴いているなら、水を飲ませよ。(同義的)

8. ねたみ

Pro 3:31 暴虐の者をうらやむな。／そのすべての道を選ばな。(同義的)

Pro 23:17 あなたは心のうちで罪人をねたんではない。／ただ【主】をいつも恐れていよ。(対照的)

9. 仕事上の不正

Pro 11:1 欺きのはかりは【主】に忌みきらわれる。／正しいおもりは主に喜ばれる。(対照的)

Pro 20:10 異なる二種類のおもり、異なる二種類の枡、／そのどちらも【主】に忌みきらわれる。(単純)

10. 人間関係

Pro 3:27 あなたの手に善を行う力があるとき、／求める者に、それを拒むな。

Pro 3:28 あなたに財産があるとき、あなたの隣人に向かい、／「去って、また来なさい。
／あす、あげよう」と言うな。(同義的)

Pro 11:12 隣人をさげすむ者は思慮に欠けている。／しかし英知のある者は沈黙を守る。
(対照的)

Pro 12:26 正しい者はその友を探り出し、／悪者の道は彼らを迷わせる。(対照的)

Pro 17:9 そむきの罪をおおう者は、愛を追い求める者。／同じことをくり返して言う者は、
／親しい友を離れさせる。(対照的)

Pro 27:6 憎む者が口づけしてもてなすよりは、／愛する者が傷つけるほうが真実である。
(対照的)

11. 精神と肉体の関係

Pro 3:1 わが子よ。私のおしえを忘れるな。／私の命令を心に留めよ。

Pro 3:2 そうすれば、あなたに長い日と、／いのちの年と平安が増し加えられる。(統合
的)

Pro 4:10 わが子よ。聞け。私の言うことを受け入れよ。／そうすれば、あなたのいのちの
年は多くなる。(統合的)

Pro 4:22 見いだす者には、それはいのちとなり、／その全身を健やかにする。(同義的)

12. 正義と不正義

Pro 17:15 悪者を正しいと認め、正しい者を悪いとする、／この二つを、【主】は忌みき
らう。(対照的)

Pro 17:26 正しい人に罰金を科し、／高貴な人をその正しさのゆえにむち打つのは、／ど
ちらもよくない。(単純)

13. 老年

Pro 20:29 若い男の光栄は彼らの力。／年寄りの飾りはそのしらが。(同義的)

Pro 17:6 孫たちは老人の冠、／子らの光栄は彼らの父である。(同義的)

14. 傲慢と謙遜

Pro 3:34 あざける者を主はあざけり、／へりくだる者には恵みを授ける。(対照的)

Pro 8:13 【主】を恐れることは悪を憎むことである。／わたしは高ぶりと、おごりと、悪の道と、／ねじれたことばを憎む。(統合的)

15. 教えられやすい人

Pro 1:5 知恵のある者はこれを聞いて理解を深め、／悟りのある者は指導を得る。(同義的)

Pro 10:17 訓戒を大事にする者はいのちへの道にあり、／叱責を捨てる者は迷い出る。(対照的)

16. ぶどう酒

Pro 20:1 ぶどう酒は、あざける者。／強い酒は、騒ぐ者。／これに惑わされる者は、みな知恵がない。(同義的、統合的)

17. 富

Pro 15:16 わずかな物を持っていて【主】を恐れるのは、／多くの財宝を持っていて恐慌があるのにまさる。

Pro 15:17 野菜を食べて愛し合うのは、／肥えた牛を食べて憎み合うのにまさる。(対照的)

Pro 19:4 財産は多くの友を増し加え、／寄るべのない者は、その友からも引き離される。(対照的)

Pro 10:2 不義によって得た財宝は役に立たない。／しかし正義は人を死から救い出す。(対照的)

18. 知恵ある者と愚か者

Pro 3:35 知恵のある者は誉れを受け継ぎ、／愚かな者は恥を得る。(対照的)

Pro 10:13 悟りのある者のくちびるには知恵があり、／思慮に欠けた者の背には杖がある。

Pro 10:14 知恵のある者は知識をたくわえ、／愚か者の口は滅びに近い。(対照的)

19. 邪悪な女

Pro 11:22 美しいが、たしなみのない女は、／金の輪が豚の鼻にあるようだ。(象徴的)

Pro 19:13 愚かな息子は父のわざわい。／妻のいさかいは、したたり続ける雨漏り。(同義的)

Pro 21:9 争い好きな女と社交場にいるよりは、／屋根の片隅に住むほうがよい。(対照的)

Pro 23:27 遊女は深い穴、見知らぬ女は狭い井戸だから。

Pro 23:28 彼女は強盗のように待ち伏せて、／人々の間に裏切り者を多くする。(統合的)

20. 高貴な女

Pro 12:4 しっかりした妻は夫の冠。／恥をもたらす妻は、／夫の骨の中の腐れのようにだ。(対照的)

Pro 5:18 あなたの泉を祝福されたものとし、／あなたの若い時の妻と喜び楽しめ。

Pro 5:19 愛らしい雌鹿、いとしいかもしかよ。／その乳房がいつもあなたを酔わせ、／いつも彼女の愛に夢中になれ。(同義的)

*良き妻については、箴 31 : 10~31 参照

結論：義人化された知恵

1. 聖句

(1) 1 : 20~33

(2) 8 : 1~36

(3) 9 : 1~6

2. 箴 1 : 20~33

Pro 1:20 知恵は、ちまたで大声で叫び、／広場でその声をあげ、

Pro 1:21 騒がしい町かどで叫び、／町の門の入口で語りかけて言う。

Pro 1:22 「わきまのない者たち。／あなたがたは、いつまで、／わきまのないことを好むのか。／あざける者は、いつまで、あざけりを楽しみ、／愚かな者は、いつまで、知識を憎むのか。

Pro 1:23 わたしの叱責に心を留めるなら、／今すぐ、あなたがたにわたしの霊を注ぎ、／あなたがたにわたしのことばを知らせよう。

Pro 1:24 わたしが呼んだのに、あなたがたは拒んだ。／わたしは手を伸べたが、顧みる者はない。

Pro 1:25 あなたがたはわたしのすべての忠告を無視し、／わたしの叱責を受け入れなかった。

Pro 1:26 それで、わたしも、／あなたがたが災難に会うときに笑い、／あなたがたを恐怖が襲うとき、あざけろう。

Pro 1:27 恐怖があらしのようにあなたがたを襲うとき、／災難がつむじ風のようにあなたがたを襲うとき、／苦難と苦悩があなたがたの上を下るとき、

Pro 1:28 そのとき、彼らはわたしを呼ぶが、／わたしは答えない。／わたしを捜し求めるが、／彼らはわたしを見つけることができない。

Pro 1:29 なぜなら、彼らは知識を憎み、／【主】を恐れることを選ばず、

Pro 1:30 わたしの忠告を好まず、／わたしの叱責を、ことごとく侮ったからである。

Pro 1:31 それで、彼らは自分の行いの実を食らい、／自分のたくらみに飽きるであろう。

Pro 1:32 わきまえない者の背信は自分を殺し、／愚かな者の安心は自分を滅ぼす。

Pro 1:33 しかし、わたしに聞き従う者は、安全に住まい、／わざわいを恐れることもなく、安らかである。」

(1) 知恵は、誰でもその声が聞こえる場所に立って呼びかけている。

(2) これは、イエス・キリストの呼びかけである。

Mat 11:28 すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

Mat 11:29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。

Mat 11:30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

60分でわかる旧約聖書(19) 「詩篇」

1. はじめに

- (1) 孤島にひとりで住む場合、一冊の本を選ぶとしたらどれにするか。
 - ①クリスチャンなら聖書と答えるだろう。
 - ②では、聖書の中のどの書を選ぶかと聞かれたら、なんと答えるか。
 - ③詩篇を選ぶ可能性は非常に高い。
 - ④詩篇を味わうのは非常に難しい。論理的な流れがなく、感情的な表現が多い。

- (2) 詩篇について知っておくべきこと
 - ①タイトル：ヘブル語で「tehillim」（賛美）である。
 - *種々の内容の詩が含まれているが、基本は「賛美」である。
 - ②詩篇は、読むものではなく、歌うものである。
 - *楽器(笛、琴、豎琴、シンバルなど)に合わせて歌うための歌詞である。
 - *神殿で歌った旧約時代の讚美歌である。
 - ③詩篇は、詩である。
 - *韻を踏むのではなく、対句法を多用している。
 - *誇張法がたびたび登場する。
 - *論理的な関連性よりは、感情的な表現が重視されている。
 - ④叙情詩は、事実の真実性を減じるものではない。

- (3) 著者
 - ①ダビデ：73篇
 - ②アサフ：12篇
 - ③コラの子たち：10篇
 - ④ソロモン：2篇
 - ⑤モーセ、エズラフ人エタン、エズラフ人ヘマン、：1篇
 - ⑥それ以外は無名：50篇
 - *2篇と95篇はダビデの作(使4:25、へブ4:7)

2. メッセージのアウトライン

- (1) 詩篇自身を示す区分
- (2) 内容に基づく区分
- (3) モーセの五書との対比に基づく区分

3. 結論：

- (1) 詩篇の解釈と適用
- (2) 神の裁きを求める詩篇
- (3) 詩篇の中に啓示されたキリスト

詩篇の中に啓示されているキリストを発見する。

I. 詩篇自身が示す区分

はじめに：頌栄が区切りのしるしになっている。

1. 1～41篇

Psa 41:13 ほむべきかな。イスラエルの神、【主】。／とこしえから、とこしえまで。／アーメン。アーメン。

2. 42～72篇

Psa 72:19 とこしえに、ほむべきかな。その栄光の御名。／その栄光は地に満ちわたれ。／アーメン。アーメン。

3. 73～89篇

Psa 89:53 主をたたえよ、とこしえに。アーメン、アーメン。

4. 90～106篇

Psa 106:48 イスラエルの神、主をたたえよ／世々とこしえに。民は皆、アーメンと答えよ。ハレルヤ。

5. 107～150篇

Psa 150:1 ハレルヤ。聖所で神を賛美せよ。大空の磐で神を賛美せよ。

Psa 150:2 力強い御業のゆえに神を賛美せよ。大きな御力のゆえに神を賛美せよ。

Psa 150:3 角笛を吹いて神を賛美せよ。琴と豎琴を奏でて神を賛美せよ。

Psa 150:4 太鼓に合わせて踊りながら神を賛美せよ。弦をかき鳴らし笛を吹いて神を賛美せよ。

Psa 150:5 シンバルを鳴らし神を賛美せよ。シンバルを響かせて神を賛美せよ。

Psa 150:6 息あるものはこぞって主を賛美せよ。ハレルヤ。

- (1) 150篇(最後の詩)は、詩篇全体への頌栄になっている。

II. 内容に基づく区分

1. 歴史的詩篇

- (1) イスラエルの歴史上の出来事と関係した歌。

(2) あるいは、作者の人生で起きた出来事と関係した歌。

2. メシア的詩篇

(1) キリストの受難とそれに続く栄光を歌った歌

(2) メシア的詩篇は16篇あるが、広く言えば、詩篇全体がメシア的である。

3. 預言的詩篇(千年王国の預言も含む)

(1) 将来のイスラエルの苦難を歌った歌

(2) 苦難に続く平和と繁栄の時代を歌った歌

4. 悔い改めの詩篇

(1) 作者の深い悔い改めを歌った歌

(2) 心砕かれた者が罪の赦しを求めて叫んでいる歌

5. 神の裁きを求める詩篇

(1) 神の民の敵に対する復讐を神に願う歌

III. モーセの五書との対比に基づく区分

1. 創世記に対応: 1~41篇(人間に焦点を合わせている)

(1) 人間が、祝福、墮落、回復という流れの中で描かれる。

(2) 神の計画の中で、キリストが神の民イスラエルのための祝福の源となる。

2. 出エジプト記に対応: 42~72篇(イスラエルに焦点を合わせている)

(1) イスラエルの滅亡 - 42~49篇

(2) イスラエルの贖い主 - 50~60篇

(3) イスラエルの贖い - 61~72篇

3. レビ記に対応: 73~89篇(神殿に焦点を合わせている)

(1) 幕屋、神殿、【主】の家、会衆などが、ほぼすべての詩篇に出てくる。

4. 民数記に対応: 90~106篇(地上のことに焦点を合わせている)

(1) 苦難と守り

5. 申命記: 107~150篇(みことばに焦点を合わせている)

(1) 完成とみことばの賛美

結論：

1. 詩篇の解釈と適用

(1) 詩篇の作者の経験

- ①イスラエルの民全体の経験と相関関係にある。
- ②イエス・キリストの経験とも相関関係にある。

(2) 詩篇は新約時代の信者に向けて書かれたものではないが、多くの教訓を含む。

- ①慰め、叱責、励まし、教えなどを含む。
- ②旧約時代の神殿は新約時代のキリストのからだの予告である。
 - * 普遍的教会は、すべての信者からなり、聖霊の内住がある。
- ③詩篇が取り上げている戦いは、私たちが戦う霊的戦いの予告である。
- ④地上でイスラエルが受ける物質的祝福は、私たちが天上で受ける霊的祝福の予告である。

2. 神の裁きを求める詩篇

(1) 詩 35

Psa 35:24 あなたの義にしたがって、私を弁護してください。／わが神、【主】よ。／彼らを私のことで喜ばせないでください。

Psa 35:25 彼らに心のうちで言わせないでください。／「あはは。われわれの望みどおりだ」と。／また、言わせないでください。／「われわれは彼を、のみこんだ」と。

Psa 35:26 私のわざわいを楽しんでいる者らは、／みな恥を見、はずかしめを受けますように。／私に向かって高ぶる者は、／恥と侮辱をこうむりますように。

- ①この種の詩篇は、戦争の時代に詠まれたものである。
- ②個人的な復讐を求めているのではなく、神の民の共同体の祈りである。
- ③神の民は、地上に神の義と平和が成就しますようにと祈っている。
- ④新約時代の信者に与えられている命令は、敵を愛することである。
- ⑤ディスペンセーションは、律法の時代から恵みの時代へと移行した。

3. 詩篇の中に啓示されたキリスト

はじめに：詩篇はキリストについて証言している。

Luk 24:44 イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」

(1) 22 篇 - 十字架にかけられたキリスト

Psa 22:1 わが神、わが神。／どうして、私をお見捨てになったのですか。／遠く離れて私をお救いにならないのですか。／私のうめきのことばにも。

(2) 23篇 - よき羊飼いきリスト

Psa 23:1 【主】は私の羊飼いです。／私は、乏しいことはありません。

(3) 40篇 - いけにえとなったキリスト

Psa 40:6 あなたは、いけにえや穀物のささげ物を／お喜びにはなりません。／あなたは私の耳を開いてくださいました。／あなたは、／全焼のいけにえも、罪のためのいけにえも、／お求めになりませんでした。

Psa 40:7 そのとき私は申しました。／「今、私はここに来ております。／巻き物の書に私のことが書いてあります。

Psa 40:8 わが神。私はみこころを行うことを喜びとします。／あなたのおしえは私の心のうちにあります。」

Heb 10:5 ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。／「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、／わたしのために、からだを造ってくださいました。

Heb 10:6 あなたは全焼のいけにえと／罪のためのいけにえとで／満足されませんでした。

Heb 10:7 そこでわたしは言いました。／『さあ、わたしは来ました。／聖書のある巻に、／わたしについてしるされているとおり、／神よ、あなたのみこころを行うために。』」

(4) 詩 110篇 - 大祭司キリスト

Psa 110:1 【主】は、私の主に仰せられる。／「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、／わたしの右の座に着いていよ。」

Psa 110:4 【主】は誓い、そしてみこころを変えない。／「あなたは、メルキゼデクの例にならない、／とこしえに祭司である。」

Heb 7:17 この方については、こうあかしされています。／「あなたは、とこしえに、／メルキゼデクの位に等しい祭司である。」

Heb 7:18 一方で、前の戒めは、弱く無益なために、廃止されましたが、

Heb 7:19 ——律法は何事も全うしなかったのです——他方で、さらにすぐれた希望が導き入れられました。私たちはこれによって神に近づくのです。

Heb 7:20 また、そのためには、はっきりと誓いがなされています。

Heb 7:21 ——彼らの場合は、誓いなしに祭司となるのですが、主の場合には、主に対して次のように言われた方の誓いがあります。／「主は誓ってこう言われ、／みこころを変えられることはない。／『あなたはとこしえに祭司である。』」——

Heb 7:22 そのようにして、イエスは、さらにすぐれた契約の保証となられたのです。

(5) 詩 118 篇 - 岩なるキリスト

Psa 118:22 家を建てる者たちの捨てた石。／それが礎の石になった。

Psa 118:23 これは【主】のなさったことだ。／私たちの目には不思議なことである。

Mat 21:42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。／『家を建てる者たちの見捨てた石。／それが礎の石になった。／これは主のなさったことだ。／私たちの目には、／不思議なことである。』

(6) 詩 2 篇 - やがて来られる王

Psa 2:1 なぜ国々は騒ぎ立ち、／国民はむなしくつぶやくのか。

Psa 2:2 地の王たちは立ち構え、／治める者たちは相ともに集まり、／【主】と、主に油をそそがれた者とともに逆らう。

Psa 2:3 「さあ、彼らのかせを打ち砕き、／彼らの綱を、解き捨てよう。」

Psa 2:4 天の御座に着いている方は笑い、／主はその者どもをあざけられる。

Psa 2:5 ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、／燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。

Psa 2:6 「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。／わたしの聖なる山、シオンに。」

Act 4:25 あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの口を通して、こう言われました。／『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、／もろもろの民はむなしいことを計るのか。』

Act 4:26 地の王たちは立ち上がり、／指導者たちは、主とキリストに反抗して、／一つに組んだ。』

Act 13:33 神は、イエスをよみがえらせ、それによって、私たち子孫にその約束を果たされました。詩篇の第二篇に、『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ』と書いてあるとおりです。

60分でわかる旧約聖書(18) 「ヨブ記」

1. はじめに

- (1) 有名ではあるが、敬遠される書である。
 - ①これは文学書(詩の形式で書かれた書)である。
 - *ヨブ記、詩篇、箴言、伝道者の書、雅歌
 - *対句法に特徴がある。
 - *1~2章とエピローグ(42:7~17)だけが散文で書かれている。
 - ②中近東(オリエント)の人々の考え方が表現されている。
 - ③神が支配される世界になぜ苦難が存在するのかという難問を扱っている。

- (2) ヨブという人物
 - ①彼は、歴史上の実在の人物である。
 - ②エゼ14:14~20に、ノアとダニエルとヨブの名が登場する。
 - ③彼は、神を恐れる裕福な人で、隣人への憐れみも持っていた。
 - ④彼が住んだ年代は、族長時代である。
 - *彼がユダヤ人だという明確な表現が出てこない。
 - *出エジプトの出来事やモーセの律法への言及がない。
 - *ヨブは、家庭の中で祭司の役割を果たしている。

- (3) 著者
 - ①不明
 - ②モーセ、エズラ、ソロモン、ヨブ、エリフ

- (4) 書かれた年代
 - ①族長時代かソロモン時代
 - ②知恵文学の形式なので、ソロモン時代が有力(口伝の情報が残されていた)

2. メッセージのアウトライン

I. ヨブの試練(1~2章)

1. 繁栄(1:1~5)
2. 試練(1:6~2:13)

II. ヨブと友人たちの論争(3~37章)

1. 第1ラウンド(3~11章)
2. 第2ラウンド(12~20章)
3. 第3ラウンド(21~37章)

Ⅲ. ヨブの解放(38~42章)

1. 神はヨブを謙遜にさせる(38:1~42:6)
2. 神はヨブを祝福する(42:7~17)

3. 結論:ヨブ記のテーマは何か。

ヨブ記を通して、人生における試練の問題について学ぶ。

I. ヨブの試練(1~3章)

1. 繁栄(1:1~5)

(1) 1:1~3

「ウツの地にヨブという名の人がいた。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。彼には七人の息子と三人の娘が生まれた。彼は羊七千頭、らくだ

三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭、それに非常に多くのしもべを持っていた。それでこの人は東の人々の中で一番の富豪であった」(1~3節)

- ①ヨブが住んでいたのは、ウツの地である。
- ②そこがどこかは分からないが、エドム(死海の南東)だと考える人もいる。
- ③ヨブは神を恐れる信仰者で、悪から遠ざかっていた。
- ④7人の息子と3人の娘が与えられていた。
- ⑤多くの家畜を所有し、その世話をするしもべたちも多くいた。

(2) 1:4~5

- ①ヨブは、家族のために祭司の役割を果たしていた。
- ②彼は、7人の息子たち一人ひとりのために、全焼のいけにえを捧げた。

2. 試練(1:6~2:13)

(1) 1:6~11

- ①話は、天での場面に移行する。
- ②ある日、神の子ら(天使たち)が神の前に立った。
- ③そこに、サタンも同席していた。
*サタンとはヘブル語で「糾弾する者」という意味である。
- ④【主】はサタンに対して、ヨブの信仰と忠実な歩みを自慢された。
- ⑤サタンは、ヨブが神を恐れる理由は、神が彼を祝福したからだと反論した。
- ⑥その祝福が取り去られたなら、ヨブは神をのろうに違いないと挑戦した。

(2) 1:12

- ①神はサタンに、ヨブの持ち物を奪ってもよいという許可を与えた。
- ②ヨブの健康を打つことは、許可されなかった。
- ③神がこの許可を与えた理由は、神のご性質に対する攻撃を排除するため。
- ④もうひとつの理由は、ヨブにさらなる霊的真理を学ばせるためである。

(3) 1:13~22

- ①シェバ人の襲撃があり、牛500くびき、雌ロバ500頭が奪われた。
- ②雷が落ち、羊7千頭が焼け死に、多くのしもべたちも死んだ。
- ③カルデヤ人が3組になってらくだ3千頭奪い、多くのしもべたちを殺した。
- ④兄の家で食事をしていた時、大風が吹いて家が倒壊した。

*その結果、7人の息子と3人の娘たちが死んだ。

⑤ヨブの信仰の言葉

「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。【主】は

与

え、【主】は取られる。【主】の御名はほむべきかな」(20~22節)

- ⑥ヨブは、この悲劇のゆえに神をのろったりはしなかった。
- ⑦サタンの予告通りには、ならなかった。

(4) 2:1~6

- ①場面は再度天に戻る。
- ②【主】はサタンに、ヨブのことを自慢された。
- ③サタンの反論
 - *ヨブは子どもたちの命を犠牲にして、神から命を救ってもらった。
 - *ヨブが神を礼拝している理由は、健康が守られているからだ。
 - *もし肉体が病めば、ヨブは信仰を失くし、神を呪うに違いない。
- ④【主】は、サタンがヨブの肉体を打つことを許可された。
- ⑤ただし、命を奪うことは禁じられた。
- ⑥許可した理由は、ヨブが神を呪うことは決してないと知っておられたから。

(5) 2:7~13

①7~8節

「サタンは【主】の前から出て行き、ヨブの足の裏から頭の頂まで、悪性の腫物で彼を打った。ヨブは土器のかけらを取って自分の身をかき、また灰の
にすわった」(7~8節)

中

- ②誰が見ても、ヨブは落ちぶれ、悲惨な状態に置かれた。
- ③彼の妻は、「神をのろって死になさい」と言った。
- ④これは、サタンが語った言葉と同じである。
- ⑤しかしヨブは、罪を犯すようなことを口にしなかった。
- ⑥3人の友人たちが来て、ヨブを慰めようとした。
 - *全員が知者として知られていた。
- ⑦彼らは、7日7夜沈黙した。

II. ヨブと友人たちの論争(4~37章)

- 1. 第1ラウンド(3~11章)
- 2. 第2ラウンド(12~20章)
- 3. 第3ラウンド(21~37章)

(1) ヨブと友人たちの論争は、3ラウンド繰り返される。

- ①ヨブが口を開いて嘆きの言葉を語る。
- ②最初の友人がそれを糾弾する。
- ③ヨブがその糾弾に反論する。
- ④次の友人がその反論を糾弾する。
- ⑤ヨブは再び反論する。
- ⑥最後の友人が、ヨブの反論を糾弾する。

*彼ら全員が、ヨブを偽善者と見ている。

(2) 3人の友人たちの三段論法

- ①すべての苦難は罪に対する裁きである。
- ②ヨブは苦しんでいる。
- ③それゆえ、ヨブは罪人である。

(3) テマン人エリファズ

- ①テマン出身(エドムのテマン)で最年長者である。
- ②夜に与えられた「霊的体験」が彼の意見の土台にある。

(4) シュアハ人ビルダデ

- ①過去の教えを重んじる伝統主義者である。
- ②過去の賢人たちの教えが、彼の意見の土台にある。

(5) ナアマ人ツォファル

- ①教条主義者である。
- ②自分は誰よりも神のことを知っていると自負している。

(6) 最後に、それまで沈黙していた若者が口を開く。エリフである。

- ①彼は、神は時には義人を訓練することがあると主張する。
- ②それゆえ、ヨブは神に従い、神を信頼すべきだと勧告する。
- ③最もまともな意見であるが、依然として裁きの目でヨブを見ている。
- ④後に神が現れた時、神はエリフの言葉を無視しておられる。

Ⅲ. ヨブの解放 (38～42章)

1. 神はヨブを謙遜にさせる (38:1～42:6)

(1) 神のスピーチ

- ①ヨブがあれほど願っていた神との対面が実現する。
- ②神からの語りかけは、ヨブが想像していたものとは全く異なる。
- ③神はヨブの問いに答えることはせず、逆にヨブに質問を投げかける。
- ④神は、苦難の意味や目的を説明することはせず、ご自身に論争を挑もうと

す

るヨブの傲慢な姿勢を糾弾される。

⑤回答不可能な質問を70以上も投げかけ、ご自身の偉大さを啓示される。

⑥神は、ヨブと対面することによって、ヨブを見捨てていないことを示され

る。

(2) ヨブの応答

「あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられるこ

と

を、私は知りました。知識もなくて、摂理をおおい隠す者は、だれか。まことに、私は、自分で悟りえないことを告げました。自分でも知りえない不思議を。さあ

聞

け。わたしが語る。わたしがあなたに尋ねる。わたしに示せ。私はあなたのうわ

さ

を耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自

分

をさげすみ、ちりと灰の中で悔いています」 (42:1～6)

2. 神はヨブを祝福する (42:7～17)

(1) 叱責を受ける3人の友人たち(42:7~9)

- ①神は3人の友人たちに対して怒りを表明された。
- ②彼らがヨブのように、神について真実を語らなかったからである。
- ③彼らは、自分たちは神を弁護していると思っていましたが、実は神について

て

偽りを並べ立てていたのである。

- ④彼らの間違いは、苦難は常に罪の結果であると主張したところにある。
- ⑤彼らは、神が苦難を別の目的のために用いることもあるという可能性を排除した。
- ⑥神は彼らに、全焼のいけにえを捧げるように命じた。

*雄牛7頭、雄羊7頭は大量のいけにえである。

⑦さらに、ヨブに仲介者になってもらい、執りなしの祈りをしてもらえという。

の

⑧彼らは一度もヨブのために祈ることはしなかったが、ここでヨブが、彼ら

の

ために執りなしの祈りを捧げるというのである。なんという皮肉か。

(2) エピローグ(42:10~17)

- ①ヨブは健康を回復し、2倍の財産を与えられた。
- ②親戚や友人たちが、すべて彼の家に招かれ食事をともにした。
- ③ヨブは、前半生よりも後半生により多くの祝福を受けた。
- ④この物質的的祝福は、義なる行為へのご褒美ではなく、神の恵みの現れである。

る。

⑤息子と娘を失った悲しみは、部分的に癒された。

*新たに、息子7人と娘3人が与えられた。

⑥ヨブはさらに140年生きた。

⑦ユダヤの伝承では、ヨブはおおよそ70歳で試練に会い、その後210歳まで生きたとされている。

⑧ヨブは、4代目の子孫を見るほどの長寿を全うした。

結論：ヨブ記のテーマは何か。

1. 一般の認識

- (1) 人生にはなぜ苦しみがあるのか。
- (2) 善良な人がなぜ苦しむのか。
- (3) 神が愛なら、なぜ悲劇が起こるのか。
- (4) しかし、ヨブ記にその答えを求めても、答えはない。

2. 正しい理解

(1) 神はいかなる場合でも主権者であり、ご自身の行動について人間に説明する必要はない。

(2) 信者はいかなることが起ころうとも、それは最善の結果につながる。

(3) 苦しみに会ったとき問うべきは、「なぜ」ではなく、「では、いかに生きるべきか」である。

(4) ヤコ5:11

「見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いであると、私たちは考えます。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いています。また、主が彼になさったことの結末を見

た

のです。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです」

①ヨブはこの苦しみを通して、より深く神と交流できるようになった。

(5) 義人が理由なく苦しむ例

①神の御子の苦しみ

60分でわかる旧約聖書(17) 「エステル記」

1. はじめに

(1) プリムの祭り

- ① アダルの月の14日と15日(現在の2月か3月)
- ② 13日にエステルの断食を記念した断食を実行する。
 - * シナゴークでエステル記が朗読される。
 - * ハマンの名が出てくるたびに、大騒ぎする。
- ③ 14日にもシナゴークに集まり、律法の朗読と祈りの時を持つ。
- ④ その後、14日～15日にかけて祝いの時を持つ(ハマンの耳、贈り物)。

(2) エステル記は、聖書の中では実にユニークな書である。

- ① 神の御名が一度も出てこない。
- ② 女性の名が書名になっている(エステル記とルツ記だけ)。
- ③ 新約聖書は一度もエステル記を引用していない。
- ④ 現在のところ、死海写本の中にはエステル記は含まれていない。
- ⑤ モーセの律法への言及(いけにえの捧げ物への言及)が一度もない。
- ⑥ 祈りへの言及が一度もない。
 - * エズラ記とネヘミヤ記では、祈りは重要な要素であった。
 - * しかし、エステルやモルデカイが祈っている箇所はない(断食はある)。

(3) 著者

- ① エズラかネヘミヤが書いたと考える人もいるが、証拠はない。
- ② ユダヤの伝承では、モルデカイが書いたとされるが、証拠はない。
- ③ ペルシヤの王宮の内情に詳しいユダヤ人であることに間違いはない。

(4) 歴史的背景

- ① エステル記は、エズラ記の6章と7章の間の出来事である。
- ② エズラ記で示した年表
 - * 前538年 クロス王の布告により、約5万人のユダヤたちが帰還した。
 - * 前515年 神殿は完成し、奉献式が行われた。
 - * 前476年 エステルがペルシヤの王妃になる。
 - * 前458年 エズラのエルサレム到着
 - * 前444年 ネヘミヤのエルサレム到着
- ③ アハシュエロス(実名はクセルクセス)は、シュシヤンに宮廷を設けていた。
 - * 3つの首都があった。
 - * バビロン、アフメタ(エズ6:2、エクバタナとも言う)、シュシヤン

*ダニエルはそこに住んだことがある(ダニ8章)。

*エステルの時代以降に、ネヘミヤはそこで王に仕えていた(ネヘ1章)。

⑤アハシュエロスは前486年に王となる。

⑥その治世の3年目(前483年)からこの物語が始まる(エス1:3)。

2. メッセージのアウトライン

I. エステルの選び(1~2章)

1. 追放される王妃ワシュティ(1章)

2. 新王妃となるエステル(2章)

II. 反ユダヤ主義の台頭(3~7章)

1. ハマンの陰謀(3章)

2. モルデカイの心配(4章)

3. エステルの勇敢な行動(5~7章)

III. 神の守り

1. 王の新しい詔書(8章)

2. ユダヤ人の勝利(9章)

3. モルデカイの栄誉(10章)

3. 結論

(1) 神の摂理

(2) ユダヤ人を巡る霊的戦い

(3) アブラハム契約

エステル記を通して、神の摂理的守りについて学ぶ。

I. エステルの選び(1~2章)

1. 追放される王妃ワシュティ(1章)

(1) 王はその治世の3年に、180日間の宴会を催した。

①全地から、主だったすべての臣下がやって来た。

②それに続いて7日間、民のために宴会を催した。

③王は王妃に、王冠をかぶって宴会場に姿を現すように命じた。

④しかし彼女は、酔客の見世物になることを拒否した。

(2) 王は7人の首長たちと相談した。

①メムカンが口を開き、王妃の退位を提案し、それが受け入れられた。

②夫に従わない妻は、厳しく処分する必要があるという理屈であった。

③王の愚かな決定は、ペルシヤ王国の隅々まで伝えられた。

2. 新王妃となるエステル(2章)

- (1) 新しい王妃を選ぶために、美人コンテストが開かれた。
 - ①集められた娘たちの中に、エステルがいた。
 - *エステルとは「星」という意味。
 - *ハダサとは「銀梅花(myrtle)」、「ミルトス(myrtus)」である。
 - ②両親は無く、モルデカイの養女となっていた(おじの娘)。
 - ③モルデカイは、捕囚民の子孫の一人だった。

- (2) 娘たちは、宦官ヘガイの管理下に置かれた(ユダヤ人とは言わない)。
 - ①エステルは、ヘガイの好意を得た(背後に神の御手が見えてくる)。

- (3) 王の好意を受けるエステル
 - ①12か月の準備期間の後、娘たちは順番に王のところに入って行った。
 - ②王の気に入られなければ、別の部屋で残りの生涯を過ごすことになる。
 - ③神に委ね切った彼女の姿は、王に深い印象を与えた。
 - ④かくして、エステルは、ワシュティに代わる王妃となった。

- (4) 忘れられたモルデカイの功績
 - ①モルデカイは偶然にも、ふたりの宦官による王の暗殺計画を耳にした。
 - ②彼はこれをエステルに知らせ、彼女はこれをモルデカイの名で王に伝えた。
 - ③ふたりの宦官は逮捕され、死刑に処せられた。
 - ④この事件は、年代記の書に書き残されたが、不思議なことが起こった。
 - ⑤王は、モルデカイのことをすっかり忘れてしまったのである。
 - ⑥しかし、アハシュエロス王の失念は、神から出たことであつた。

II. 反ユダヤ主義の台頭(3~7章)

1. ハマンの陰謀(3章)

- (1) 同調しないユダヤ人
 - ①ハマンは、王によって高い地位に登用された。
 - ②王の家来たちはみな、ハマンに対してひざをかがめてひれ伏した。
 - ③しかし、モルデカイだけはそれを拒否した。
 - ④理由を問われたとき、彼は、「自分はユダヤ人だから」とだけ答えた。

- (2) ユダヤ人抹殺計画

- ①ハマンは、モルデカイだけでなく、ユダヤ民族を根絶やしにしようとした。
- ②彼は、ユダヤ人抹殺計画を実行する時期を決めるために、古代オリエントの習慣に従ってくじを引き、神意を求めた。
- ③最初の月(1月)にくじを引いたところ、最後の月(12月)に当たった。
 - *実行までに約1年間の猶予ができた(アダルの月の13日)。
- ④ハマンの王への進言
 - *ユダヤ人の存在は王のためにならない。
 - *この計画には経済的利益が伴う(金庫に銀340トンが納入される)。

2. モルデカイの心配(4章)

(1) 灰をかぶるモルデカイ

- ①モルデカイは、王の門の前で叫び声を上げた。
- ②王国内のすべてのユダヤ人が、叫び声を上げた。

(2) エステルへの要請

- ①モルデカイの叫びは、エステルに非常事態を知らせるためであった。
- ②エステルはひどく悲しみ、着物を送って荒布を脱がせようとした。
 - *王宮にいた彼女には、何も知らされていなかった。
- ③その後ふたりは、宦官を通して意思の疎通を図った。
 - *自分のことが原因でハマンが陰謀をしかけたこと
 - *ハマンが王の金庫に納めると約束した正確な金額
 - *発布された法令の文書の写し
- ④モルデカイは、「自分の民族のために王に憐みを求めるように」と要請した。

(3) 消極的な反応

- ①ペルシヤの法律では、王に召されないで内庭に入ると、死刑に処せられる。
- ②しかし、王がその者に金の笏を差し伸ばした場合は、例外的に赦される。
- ③王に面会を求めるためには、死刑になる覚悟が必要であった。
- ④しかも彼女は、このところ30日間も王のところに召されてはいなかった。

(4) モルデカイの助言の言葉

- ①エステルもユダヤ人虐殺法の対象であり例外ではない。
- ②今行動しないならば、神は別の人物を立てるであろう。
- ③エステルに与えられた王妃としての立場は、この時のために与えられた。

(5) エステルの応答

- ①エステルは、自分の判断で行動を開始する。
- ②シュシヤンのユダヤ人共同体に、三日三晩断食してくれるように要請した。
- ③「私は、死ななければならないのでしたら、死にます」
- ④これは諦めの言葉ではなく、最善をなさる神への信頼の言葉である。

3. エステルの勇敢な行動(5~7章)

(1) 王の好意を得るエステル

- ①3日の断食の後、エステルは王宮の内庭に立った。
- ②王は彼女を見て、笏を差し伸ばした。「彼女は王の好意を受けた」
- ③彼女は、自分が設ける宴会にハマンとともに来てほしいと願った。
- ④それが叶えられると、再度ハマンと宴会に来てほしい、そのときには何を願っているかを打ち明けると王に告げた。

(2) ハマンの自慢

- ①ハマンは上機嫌で宴会から帰宅した。
- ②しかし、自分を恐れないモルデカイの姿を見かけると、憤りに満たされた。
- ③家に帰りそれを告げると、妻ゼレシュと友人たちがこう助言した。
「高さ50キュビト(22メートル)の柱を立て、王の許可をもらってモルデカイをそれにかければよい」
- ④ハマンはその計画に同意する。
- ⑤この夫婦は、王がハマンの願いを聞き届けてくれるにちがいないという前提のもとに、計画を進めている。

(3) 眠りを奪われた王

- ①その夜、王は眠れなかったので、年代記の記録を読ませた。
 - *モルデカイの通報によってふたりの宦官を捕らえたという事件
 - *驚いたことに、モルデカイにはなんの報償も与えていない。
- ②王がモルデカイに何を与えるべきかを考えていたちょうどそのとき、ハマンが自分の計画を持って王宮の外庭に入って来た。
- ③王はハマンに、「王が榮譽を与えたいと思う者には、どうしたらよからう」とたずねた。
- ④ハマンはこれを自分のことと取り、図々しい提案をする。
- ⑤エス6:7~9

Est 6:7 王にこう言った。「王が榮譽を与えることをお望みでしたら、

Est 6:8 王のお召しになる服を持って来させ、お乗りになる馬、頭に王冠を着けた馬を引いて来させるとよいでしょう。

Est 6:9 それを貴族で、王の高官である者にゆだね、榮譽を与えることをお望みになる人にその服を着けさせ、都の広場でその人を馬に乗せ、その前で、『王が榮譽を与えることを望む者には、このようなことがなされる』と、触れさせられてはいかがでしょうか。」

- ⑥王となったらこのような姿になれるのだというハマンの下心が見える。
- ⑦王はその提案を受け入れ、そのようにモルデカイにせよと命じる。
「一つもたがえてはならない」というだめ押しの言葉まで付いた。

(4) 逆転する立場

- ①ハマンは、モルデカイに榮譽を与えた後、頭をおおい、嘆きながら急いで家に帰った。
- ②この次第を妻と友人たちに話すと、冷たい反応が帰って来た。
「モルデカイが、ユダヤ民族のひとりであるなら、あなたはもう彼に勝つことはできません。きっと、あなたは彼に負けるでしょう」
- ③ハマンの友人たちは「知恵ある者たち」と呼ばれているが、これは皮肉。

(5) 王の前でとりなすエステル

- ①エステルが王の前に心を明かす時が来た。
- ②彼女は、自分のために、またユダヤ民族のために、命乞いをした。
- ③王は、予想もしなかった内容に驚いた。
「そんなことをあえてたくらんでいる者は、いったいだれか。どこにいるのか」
「その迫害する者、その敵は、この悪いハマンです」
- ④ハマンは、王と王妃の前で震え上がった。

(6) 柱にかけられるハマン

- ①王の命令によって、ハマンは、モルデカイのために用意しておいた柱にかけられた。
- ②ハマンの死は、自業自得である。

Ⅲ. 神の守り

1. 王の新しい詔書(8章)

(1) 没収されるハマンの財産

- ①アハシュエロス王は、ハマンの家を没収し、それをエステルに与えた。
- ②ハマンから取り返した指輪をモルデカイに与え、彼を高い地位に登用した。

(2) 取り消せない王の文書

- ①当時のペルシヤの習慣では、王の命令で発布された法律は取り消せない。
- ②そこで王は、エステルとモルデカイに新しい法を作る許可を与えた。
- ③ユダヤ人を襲う者に反撃し、滅ぼすことを許すという法律ができた。

(3) 祝宴を張るユダヤ人

- ①新しい法令が届いたどの州、どの町でも、ユダヤ人は歓喜に満たされ、祝宴を張って、その日を祝日とした。
- ②ユダヤ人への恐れが広がった。
- ③ユダヤ人とその敵の立場が逆転した。

2. ユダヤ人の勝利 (9章)

(1) 勝利の中での慎み

- ①相反する二つの法令があった。
 - *ユダヤ人の敵はユダヤ人を虐殺することを許された。
 - *ユダヤ人は自己防衛のために抵抗することを許された。
- ②大多数の民衆は、中立の立場を取った。
- ③戦いの結果は、ユダヤ人の大勝利であった。
 - *帝国内全体で、ユダヤ人を憎む者たち **75,000** 人が殺された。
 - *第二の法令がなかったら、数十万人のユダヤ人が殺されていただろう。
- ④「ユダヤ人たちは、獲物には手をかけなかった」という表現が3回。
 - *ユダヤ人たちは単なる暴徒ではなかった。

(2) 祝宴の日

- ①第12の月の13日に敵を破ったユダヤ人たちは、14日を祝宴と喜びの日とした。
- ②シュシャンにいるユダヤ人たちは2日間戦ったために、他の地区より1日遅れの15日を祝宴の日とした。
- ③この祝宴は、プル(くじ)にちなんでプリム(プルの複数形)と呼ばれた。

3. モルデカイの榮譽 (10章)

- ①ユダヤ人モルデカイは、ユダヤ民族の間で深い尊敬を受けただけでなく、メディアとペルシヤの王の年代記にその名を残すこととなった。

結論

1. 神の摂理

(1) 神の摂理の例

- ①エステルは絶妙なタイミングで王妃に選ばれた。
- ②モルデカイは王を暗殺する陰謀を発見した。
- ③くじを引いてユダヤ人虐殺の日を決めたが、それが年の終わりであった。
- ④王はひと月の間エステルを無視していたが、彼女に行為を示した。
- ⑤王は、エステルが2度目の宴会を開くことを認めた。
- ⑥王の不眠が、モルデカイの過去の善行を思い出すきっかけになった。

(2) 神の御名は出てこないが、神の御手は随所に現れている。

2. ユダヤ人を巡る霊的戦い

(1) ユダヤ民族迫害の背後には、サタンの力が働いている。

- ①ユダヤ民族は、歴史上11回にわたって民族抹殺の危機に直面してきたといわれている。
- ②反ユダヤ主義は、神の計画の否定につながる。
- ③ハマンは、反キリストの型である。

3. アブラハム契約

(1) 神は契約を守るお方である。

- ①クロス王の勅令以降、ユダヤ人たちは約束の地に帰還し、モーセの律法に従って生きるように命じられた。
- ②しかし、約束の地に帰還したのは少数のユダヤ人たちであった。
- ③モルデカイとエステルも、約束の地に帰還しなかったユダヤ人である。
- ④彼らは「イスラエルの残れる者」ではなく、霊的状态も貧弱であった。
- ⑤ただ、イスラエルの神が自分たちを守ってくださることは信じていた。
- ⑥そして神は、離散の地に住むユダヤ人たちをも守られた。

(2) 3つの祭り

- ①過越の祭り(パロの迫害)
- ②プリムの祭り(ハマンの迫害)
- ③ハヌカの祭り(アンティオコス・エピファネスの迫害)

(3) 戦いの中にあつた帰還民は、エステル記の内容によって大いに励まされた。

(4) ロマ5:8~9

Rom 5:8 しかし私たちがまだ罪人であつたとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

Rom 5:9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

60分でわかる旧約聖書(16) 「ネヘミヤ記」

1. はじめに

(1) 書名と著者

- ①ネヘミヤ記は、著者ネヘミヤの名が付けられた書である。
 - *エズラ記は、神殿と霊的生活に焦点を合わせた書である。
 - *ネヘミヤ記は、城壁と日常生活に焦点を合わせた書である。
 - *聖書的人間観は、霊肉が合致したものである。
- ②ネヘミヤの人物像に関しては、ネヘミヤ記だけが唯一の情報源である。
 - *恐らくペルシヤで生まれたのであろう。
 - *ペルシヤ王アルタシャスタ1世(前5世紀)の献酌官であった。
 - *つまり、宮廷で仕える高官だったということである。
 - *知識、知恵、判断力、人格的な信頼性などを併せ持っていた。

(2) 3人のリーダーたち

①ゼルバベル

- *前538年、ゼルバベルに導かれて最初のグループが帰還した。
- *多くの妨害の中で、神殿再建を果たした。前515年。

②エズラ

- *80年後(前458年)、エズラに導かれて第2のグループが帰還した。
- *民に律法を教え、霊的覚醒をもたらした。

③ネヘミヤ

- *14年後(前444年)、ネヘミヤがエルサレムに帰還した。
- *城壁を再建した。
- *民の社会生活と経済生活を確立させた。

2. メッセージのアウトライン

I. 城壁の再建(1~6章)

- 1. 準備(1~2章)
- 2. 民の参加(3章)
- 3. 種々の妨害(4~6章)

II. 民の生活の再建(7~13章)

- 1. 民の登録(7章)
- 2. 律法の朗読(8章)
- 3. 罪の告白と契約の締結(9~13章)

結論：ネヘミヤのリーダーシップ

ネヘミヤ記を通して、聖書的リーダーシップについて考える。

I. 城壁の再建(1~6章)

1. 準備(1~2章)

(1) エルサレムの状況

- ①ユダから来たハナニという人物によって、エルサレムの惨状を知らされる。
- ②エルサレムの城壁はくずされ、その門は火で焼き払われたままである。
- ③帰還民たちの生活は困難を極め、回りの人たちのそしりを受けている。
- ④外敵の攻撃があれば、町を守ることができない状態にある。

(2) ネヘミヤの反応

- ①深い悲しみ
- ②断食をともなった数日に及ぶ祈り
- ③宮廷での快適な生活を拒否し、自らを帰還民の立場に置いた。
- ④祈りの内容(利己的なものではなく、神の業が前進するようにとの願い)
 - *神の偉大さを認め告白する。
 - *イスラエルの罪の告白(私と言い、私たちと言う)
 - *エルサレムに行く許可を王から得られるようにとの願い

(3) 王の許可

- ①それから4ヵ月間、彼は沈黙していた。
- ②王から質問を受けたので、エルサレムへの一時帰還を申し出た。
- ③川向こうの総督たちへの手紙を得た。
- ④王に属する園の番人アサフへの手紙も得た。大量の材木を必要とした。
- ⑤王の許可が出たのは神の恵みのゆえであると告白している。
- ⑥およそ2ヶ月かけて、エルサレムに帰還した。

(4) 夜間の城壁の調査

- ①現状認識が重要である。
- ②それを基に綿密な計画を立てる。
- ③それまでは、軽々しく計画を口にしてはならない。
- ④最後が、計画の発表である。

2. 民の参加(3章)

- (1) 彼は、各人に具体的な任務を割り当てました。

- ①「〇〇の次に」、「そのあとに」などの表現が28回も出てくる。
- (2) それぞれの居住地に近い場所を仕事場とした。
 - ①家に近いので、心情的なかかわりが深くなる。
 - ②長距離を移動しなくてもいいので、時間の無駄が省ける。
 - ③家族を守ろうとするので、容易に持ち場を放棄することがない。
 - ④工事そのものが、家族全体が取り組むプロジェクトとなる。
- (3) エルサレム郊外に住む者たちにも、仕事場が与えられた。
 - ①エルサレムの住民が工事を行うのが難しいような場所が割り当てられた。
 - ②職業別に仕事場が割り当てられることも行われた。

3. 種々の妨害(4~6章)

(1) 妨害の内容

- ①あざけり
- ②暴力
- ③落胆
- ④恐れ
- ⑤利己的要求
- ⑥狡猾
- ⑦中傷
- ⑧脅迫

(2) 城壁の完成

- ①城壁は52日で完成した。
- ②最初にエルサレムの惨状を知ってから、1年弱で城壁の修復工事が完了した。
- ③城壁が完成したという知らせは、ユダヤ人の敵たちを驚かせた。
- ④彼らは、背後にイスラエルの神がおられることを認めざるを得なかった。

II. 民の生活の再建(7~13章)

1. 民の登録(7章)

(1) 人口調査

- ①この町を純粋なユダヤ人の血統の者たちによって満たそうとした。
- ②ゼルバベルや他の指導者たちとともに帰還した人たちの系図が発見された。
- ③エズ2章の系図が神殿に保管されていたのであろう。

- (2) 人々は、自分たちの先祖の地に住み着いた。
 - ①ネヘミヤが意図したのは、エルサレムを本物のユダヤ人で満たすこと。
 - ②霊的覚醒は、最も本質的な事項を整えることから始まる。

2. 律法の朗読(8章)

- (1) 城壁が完成すると、民はエズラから律法を学ぶことを渴望した。
 - ①彼らは、自分たちの町々を出て、水の門の前の広場に集まって来た。
 - ②第7の月の1日は、ラッパの祭りの日(レビ23:24、民29:1)。
 - ③宗教的カレンダーでは新年に当たる。
- (2) エズラが朗読する律法の書(モーセの五書)に老若男女が耳を傾けた。
 - ①それが、夜明けから真昼まで続いた。
 - ②聞いた人たちは、それを理解した。
 - ③2週間後、忘れていた仮庵の祭りを実行した(ヨシュアの時代以来のもの)。

3. 罪の告白と契約の締結(9~13章)

- (1) 悔い改め
 - ①仮庵の祭りは第7の月の22日に終わった。そして24日に、再度集まった。
 - ②目的は、「自分たちの罪と、先祖の咎を告白」するためであった。
 - ③悔い改めの表現として、いくつかの行為が上げられている。
 - *断食
 - *荒布
 - *頭に土をかける
 - ④集ったユダヤ人たちは、全員が外国人の妻との離縁を実行した人たち。
 - ⑤昼の間の約3時間、ユダヤ人たちは立ったままで律法の朗読を聞いた。
 - ⑥次の3時間、彼らは自らの罪を告白し、【主】を礼拝した。
- (2) ネヘ9:5~10:39は、古代中近東の宗主権契約の形式で書かれている。
 - ①契約の前文(9:5~6)
 - ②歴史の回顧(9:7~37)
 - ③契約の承認(9:38~10:29)
 - ④契約条項の確認(10:30~39)
- (3) 城壁の奉献式が行われた。

結論：ネヘミヤのリーダーシップ

- (1) 使命感
- (2) 優先順位
- (3) 達成可能なゴール
- (4) 祈り
- (5) 神の関与の確信

1. 使命感を持っていた。
 - ①エルサレムの城壁の修復は、町の防御を考えると緊急の課題であった。
 - ②ネヘミヤは、それを達成するのが自分の使命だと確信した。
 - ③自らの人生の文脈と、今置かれている地位や立場を考慮する必要がある。
2. 優先順位を明確にした。
 - ①リーダーが正しい優先順位を示すと、フォロワーは知恵と力を得る。
 - ②自分ではなく、神を第一とするなら、日々の生活に新しい可能性が開けてくる。
3. 理性的で達成可能なゴールを設定した。
 - ①リーダーは、夢物語のようなゴールを設定してはならない。
 - ②非現実的なゴールは、信仰的に聞こえるが、フォロワーを落胆させる。
 - ③「人間の努力」の範囲でゴールを設定するのも間違いである。
 - ④「人間の努力+信仰」で達成できそうなゴールがいい。
4. 重要な局面で祈りを重視した。
 - ①この項目は、聖書的リーダーシップの特徴である。
 - ②「人間の努力+信仰」という原則が輝き出すチャンスである。
 - ③ゴールが崇高なものであればあるほど、敵の妨害も激しくなる。
5. 神がこの計画に関与しておられることを民に確信させた。
 - ①試練の中でリーダーがなすべき最高の責務は、フォロワーを励ますことである。
 - ②成功への方程式を語るよりも、神が関与しておられることを確信させる。
 - ③フォロワーの心が変われば、行動が変わり、結果的に状況が変わる。

60分でわかる旧約聖書(15) 「エズラ記」

1. はじめに

(1) 書名と著者

- ①エズラ記は、祭司エズラの名が付けられた書である。
- ②ある時期、エズラ記とネヘミヤ記は、1冊の書であった。
- ③しかし、それより以前には今と同じように別の書として扱われていた。
*エズ2章とネヘ7章は、ほぼ同じ内容である(帰還民のリスト)。
- ④歴代誌同様、著者は恐らくエズラであろう。
*7:27~9:15は、一人称で書かれている。
- ⑤エズラは、もっと注目されてよい人物である。
*大祭司ヒルキヤの子孫である(エズ7:1)。
*ヒルキヤは、ヨシヤ王の時代に、神殿でモーセの律法を発見した。
*それがきっかけで、南王国(ユダ)にリバイバルが起こった。
- ⑥エズラは、バビロン捕囚の間、祭司として働くことは不可能であった。
- ⑦その間、彼はモーセの律法を熱心に学んだ。「学者」と呼ばれる。

(2) 内容

- ①エズラ記は、イスラエルの民の霊的、信仰的歴史である。
- ②エズラは、存在するさまざまな資料を用いて、この書を書いた。
*ペルシヤ帝国の公式文書は、アラム語で書かれている。
*アラム語は、当時の世界共通語である。
- ③世俗的歴史の記録が、霊的、信仰的歴史の記述に用いられる。
*歴史は、神の働きの足跡である。
- ④バビロン捕囚は70年続いた。
- ⑤そこから帰還した民の生活を描いている。
- ⑥捕囚期後の歴史書は、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記である。
- ⑦捕囚期後の預言書は、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書である。
- ⑧最初の読者は、エズラと同時代のユダヤ人たちである。
- ⑨問題に直面していた帰還民たちには、大きな励ましとなった。

2. メッセージのアウトライン

I. 国の再建：ゼルバベルの指導(1~6章)

1. カナンの地への帰還(1~2章)
2. 神殿の再建(3章)
3. 敵の妨害との戦い(4~6章)

II. 信仰生活の再建：エズラの指導(7～10章)

1. エルサレムに到着するエズラ(7～8章)
2. 民の罪を告白するエズラ(9章)
3. 国を清めるエズラ(10章)

結論：私たちへの適用

1. 悔い改めの力
2. みことばの力

エズラ記を通して、リバイバルの原則について考える。

I. 国の再建：ゼルバベルの指導(1～6章)

1. カナンの地への帰還(1～2章)

(1) 年表

- ①前538年 クロス王の布告により、約5万人のユダヤたちが帰還した。
- ②前515年 神殿は完成し、奉獻式が行われた。
- ③前476年 エステルがペルシヤの女王になる。
- ④前458年 エズラのエルサレム到着

(2) 神は、支配者を支配しておられる。

- ①エレミヤの預言：バビロン捕囚は70年で終わる。
- ②ペルシヤのクロス王が、その預言を成就させた。
 - *ユダヤ人の帰還と神殿再建を許可した。
 - *政治目的のためであった(周辺に傀儡政権を置くことが目的)。

(3) 帰還した民の人数は、約5万人弱であった。

- ①大半が、バビロンに留まった。
 - *物質主義の束縛
 - *バビロン捕囚は、靈的問題への最終的な回答にはならなかった。
- ②帰還した人たちは、「イスラエルの残れる者」である。
 - *生活の安定よりも、神との関係を優先させた人たちである。

2. 神殿の再建(3章)

(1) 帰還民たちは、エルサレムだけでなく、それ以外の町々にも住み着いた。

- ①ベツレヘム、アナトテ、ラマ、ゲバ、ミクマシュ、ベテル、アイ、エリコ
- ②エズラは、「すべてのイスラエル人」という言葉を使っている。
- ③帰還民の中心はユダ族とベニヤミン族であるが、北の10部族もこの中に含

まれていることを、彼は強調している。

- (2) 帰還民たちは、神殿建設のために、能力に応じてささげ物を捧げた。
 - ①金は約256キロ、銀は約3トン。
 - ②これは、自発的ささげ物で、新約時代の献金と同じである。
- (3) 最初に、神殿が建っていた場所に祭壇を築いた。
 - ①仮庵の祭りを祝った。
 - ②帰還民たちは、祭壇を中心にひとつとなった。
 - ③私たちも、十字架を中心にひとつになる。
- (4) 祭壇完成から7ヶ月後(帰還の翌年の2月)に、神殿の工事を開始した。
 - ①城壁再建の前に、神殿の建設に着手した。
 - ②城壁は防衛のためであるが、いかなる城壁も神がともにいないなら虚しい。
 - ③神殿建設は、彼らの真ん中に神の臨在を招き入れるためのものであった。
- (5) 神殿の礎が据えられた喜び
 - ①祭司とレビ人たちは、ダビデ王の先例に倣って【主】を賛美した。
 - ②年老いた世代の中には、大声をあげて泣く人もいた。
 - * ソロモンの神殿と比較して第二神殿は貧弱であった。
 - * 神殿の豪華さは、神の栄光の現れである。
 - * 彼らは、神の栄光のために嘆いたのである。
 - ③この嘆きは、私たちへの教訓となる。

3. 敵の妨害との戦い(4~6章)

- (1) アッシリヤ帝国は、征服した地に異民族を連れてきて雑婚を図った。
 - ①その混血民の子孫たちが、神殿建設に対する妨害が始めた。
 - ②その中心がサマリヤ人である。
- (2) 彼らは、工事に協力するという申し出をした。
 - ①これは、指導者たちをかく乱するためである。
 - ②彼らは、自分たちもイスラエルの神を求めていると言った。
 - ③彼らの信仰は混合主義で、【主】以外の神々も礼拝の対象となっていた。
 - ④ここでの敵は、現代の自由主義神学者のようなものである。
- (3) 政治的リーダー(ゼルバベル)と宗教的リーダー(ヨシュア)

- ①毅然とした態度で、ただちに拒否した。敵に付け入る隙を与えない。
- ②自分たちは、イスラエルの神のために宮を立てようとしている。
*サマリヤ人が礼拝している神とイスラエルの神は、同じ神ではない。
- ③宮の建設計画は、クロス王が自分たちに命じたものである。
*それゆえ、自分たちだけで完成させる。

- (4) 敵は、かく乱戦法から露骨な脅しに戦略を変えた。
- ①サマリヤ人は、建設に携わっている人たちを脅迫した。
 - ②議官(宮廷の役人)を買収して、この計画を打ちこわそうとした。
 - ③工事は中断され、14年後に再開された(4:24)。

(5) 預言者ハガイとゼカリヤの活躍

- ①ゼルバベルとヨシュアは、神殿の工事を再開した。
- ②神殿がなければ、モーセ契約の内容を実行することができない。
- ③ふたりの預言者は、神殿建設を最優先課題とした。
- ④クリスチャンライフにおいても、最優先課題というものがある。

(6) ダリヨス王は、クロス王の布告に基づき法的許可を与えた。

- ①川向こうの総督タテナイが妨害の中心人物であった。
- ②かつて工事を妨害した者が、神の御業を実行する者とされた。

(7) エズ 6:15

Ezr 6:15 こうして、この宮はダリヨス王の治世の第六年、アダル月の三日に完成した。

- ①神殿が完成したのは、前515年のアダル月(2-3月)。
- ②前536年の着工から21年後。
- ③第一神殿が破壊されて(前586年8月12日)から、70年後。
- ④ユダヤ人たちは、70年ぶりに過越の祭りを祝った。
- ⑤挫折を乗り越え、神の計画を完成に導く人は幸いである。
- ⑥試練の中にいる人に対して、聖書から励ましの言葉を語る人も幸いである。

(8) エズ 1~6章の意義

- ①最初の帰還から80年経ってから、エズラがエルサレムに到着した。
- ②エズ 1~6章は、エズラが到着する前に起こったことである。
- ③神殿建設の記録は、神殿での礼拝を行う人たちに励ましをもたらした。

II. 信仰生活の再建：エズラの指導(7～10章)

1. エルサレムに到着するエズラ(7～8章)

(1) 7～10章は、バビロンからの第2次帰還の様子を取り上げている。

①エズ6:22と7:1の間には、57～58年のギャップがある。

(2) エズラの系図

①レビ族出身で、アロンの子孫。

②彼は、祭司として民に律法を教える権威を持っていた。

③モーセの律法に精通した律法学者であった。

④ネヘミヤの場合は宮廷での高官であった。

⑤異教の王であるアルタシャスタの好意を得ていた。

(3) エズラの決心(エズ7:10)

Ezr 7:10 エズラは、【主】の律法を調べ、これを実行し、イスラエルでおきてと定めを教えようとして、心を定めていたからである。

①【主】の律法を調べる。

②学んだことを実行に移す。

③他の人たちに律法を教える。

*この順番は、祝されたミニストリーを展開するための秘訣である。

(4) アルタシャスタは、エズラをイスラエルの地における正義の執行役に命じた。

①エズラには、さばきつかさや裁判官を任命するという権威が与えられた。

②彼は、ペルシヤの王にこのような思いを与え、王と議官たちの好意を自分に向けさせてくださったのは、イスラエルの神であると告白している。

③神に栄光を帰し、自分の手柄にしていない。

(5) エズラとともに帰還した人数

①79年前の帰還民の数(5万人弱)と比べると、ほぼ10分の1である。

②驚く必要はない。「イスラエルの残れる者」は常に少数派である。

(6) 旅のための準備

①神の祝福と守りを願うための断食を、民に命じた。

②エズラは、護衛部隊を付けることを王に要請しなかった。

③イスラエルの神が力と恵みに溢れたお方であることを王に証言していた。

(7) エルサレム到着後

- ① 神殿で全焼のいけにえをささげた。
- ② 雄牛12頭は、イスラエル12部族のためである。

2. 民の罪を告白するエズラ(9章)

(1) 雑婚の問題

- ① 帰還の理由は、信仰の道に立ち帰るためであったが、民の心には古い罪の性質が残っていた。
- ② エズラは、「雑婚」(異教徒との結婚)の罪があることを知った。
- ③ 異民族との結婚は、偶像礼拝をもたらす(ソロモンの事例)。
- ④ エズラは悲しみ(着物を裂く行為)、大いに怒った(毛を抜く行為)。
- ⑤ ここで彼は、捕囚が再び起こる可能性を感じたに違いない。
- ⑥ 彼は、夕方のささげ物の時刻(午後3時)まで黙して座っていた。
- ⑦ 彼の周りには、「イスラエルの神のことばを恐れている者たち」(真の信仰者たち)が集まって来た。
- ⑧ 隣人に対する寛容は美徳であるが、罪に関して寛容であることは大変危険なことである。

(2) エズラの祈り

- ① 夕方のささげ物の時刻(午後3時)になって祈り始める。
- ② 彼自身は無罪であるが、民の罪が自分の罪であるかのように祈っている。

(3) 祈りの内容

- ① 民が約束の地に帰還できたのは、神の恵みのゆえである。
- ② ペルシヤの王たちを動かして、神殿と町の再建を可能にさせたのも、神の恵みの業である。
- ③ 雑婚の罪に関しては、どんな言い訳も通用しない。
- ④ 雑婚によって、イスラエルの地に汚れと忌むべき習慣が持ち込まれた。
- ⑤ これによって、将来の祝福が危険にさらされた。
- ⑥ エズラは特別な要請をしたわけではなく、ただ神の前にひれ伏した。
- ⑦ エズラは神のいくつかの属性を認め、列挙している。

*あわれみ(8節)

*恵み(9節)

*怒り(14節)

*正義(15節)

3. 国を清めるエズラ(10章)

(1) 罪を認める人々

- ①エズラのところに、「雑婚の罪」を悲しんでいた人々が集まって来た。
- ②指導者層が動き始めたのを見て、民衆も行動を起こし始めた。
- ③シェカヌヤという人物が、異教徒の妻と子どもを追放することを提案した。
- ④この提言が神の御心に叶ったものであるかどうかは、議論の余地がある。
- ⑤ひとつ言えるのは、捕囚から帰還した直後の時代には、このような厳しい対応が必要だったということである。
- ⑥イスラエルの神を信じるようになれば、異邦人の妻でも追放されないというのは、確かな希望である。
- ⑦律法には、裁きの側面と恵みの側面がともに備わっている。

(2) 神殿に集う民

- ①エズラがおふれを出し、3日後に、民はエルサレムに集まった。
- ②第9の月というのは、今の11月～12月で、雨季に入っている。
- ③あいにくの大雨であったが、集会は予定通りに開催された。
- ④エズラは、民の罪(外国の女と結婚したこと)を糾弾した。
- ⑤その罪を認め、【主】に告白すべきだと勧告した。
- ⑥さらに、霊性を聖く保つために、外国の妻を離別すべきだと命じた。
- ⑦全集団は、エズラの勧告に従うと大声で応答した。
*この問題を処理するのに3ヶ月かかった。
- ⑧民は、大雨の中で罪を告白し、悔い改めを実際の行動で示した。

(3) 新約聖書は、このテーマに関連して2つのことを教えている。

- ①不信者と「つり合わぬくびき」を共にしてはならない(2コリ6:14～18)。
- ②すでに未信者と結婚しているなら、相手が同意している限り、離婚すべきではない(1コリ7:12～13)。

結論：私たちへの教訓

1. 悔い改めの力

- (1) 霊性の再建が優先される。
 - ①神殿が再建され、立派な祭儀が行われても、それだけではなんの意味もない。
- (2) 民の霊性の再建のために必要とされたのは、悔い改めである。
 - ①ここに、私たちへの希望がある。
- (3) どんなに神から遠く離れた所にいる人でも、悔い改めを通して神に立ち帰ることができる。

2. みことばの力

- (1) エズラ記は靈的覚醒の書である。
- (2) みことばを学び、それを生活に適用し、悔い改めが必要なら悔い改める。
- (3) エズラは、宗教改革者であり、リバイバリストである。

①ネヘミヤ記8章にも登場する。

- (4) リバイバルは、組織論や方法論では起こらない。
- (例話) D・L・ムーディ（19世紀後半に活躍した米国人のリバイバリスト）

「次のリバイバルは、聖書研究によるリバイバルであろう」

Ezr 9:4 捕囚から帰って来た人々の不信の罪のことで、イスラエルの神のことばを恐れている者はみな、私のところに集まって来た。私は夕方のおさげ物の時刻まで、色を失ってじっとすわっていた。

Ezr 10:3 今、私たちは、私たちの神に契約を結び、主の勧告と、私たちの神の命令を恐れる人々の勧告に従って、これらの妻たちと、その子どもたちをみな、追い出しましょう。律法に従ってこれを行いましょう。

- (5) 「聖書研究から日本の靈的覚醒（目覚め）が」

60分でわかる旧約聖書(14) 「歴代誌第二」

1. はじめに

(1) 書名

- ①サムエル記、列王記、歴代誌は、それぞれ本来は一書である。
- ②七十人訳が便宜的に第一と第二に分けた。
- ③それ以降、その習慣が定着した(ヘブル語聖書も同様)。

(2) 著者

- ①恐らくエズラであろう(ユダヤ教の伝統)。
- ②用語や文章のスタイルが、エズラ記とネヘミヤ記に似ている。
- ③歴代誌にはエズラ記とネヘミヤ記も含まれていたと思われる。

(3) 内容

- ①ヘブル語聖書の最後の書である。
- ②歴代誌第一の内容は、サムエル記第一と第二に対応している。
- ③歴代誌第二の内容は、列王記第一と第二に対応している。
- ④列王記は預言者の視点から書かれている。政治的記録。
- ⑤歴代誌は祭司の視点から書かれている。宗教的記録。
- ⑥歴代誌が強調するテーマ

*レビ人、神殿建設、申命記に記された神の契約、聖なる都エルサレム

2. メッセージのアウトライン

- I. ソロモンの治世(1~9章)
- II. 王国の南北分裂(10~12章)
- III. 南王国の崩壊(13~36章)
 1. アサ(14~16章)
 2. ヨシヤパテ(17~20章)
 3. ヨアシュ(23~24章)
 4. ウジヤ(26章)
 5. ヒゼキヤ(29~32章)
 6. ヨシヤ(34~35章)

結論：私たちへの適用

歴代誌を通して、歴史の中に見られる霊的原則について考える。

I. ソロモンの治世(1~9章)

1. 1列1~11章の内容とほぼ同じ。

(1) ソロモンは【主】に信頼してその治世を始めた。

①しかし、徐々に心は【主】から離れて行った。

②外国の妻たちが持ち込んできた偶像を礼拝するようになった。

(2) 【主】が王たちに禁じたこと(申17:14~20)をすべて行った。

①馬や戦車を増やすこと

②多くの外国の妻を持つこと

③金銀を増やすこと

(3) 王国は、物質的には栄えていたが、霊的には崩壊しつつあった。

II. 王国の南北分裂(10~12章)

1. ソロモンの息子レハブアム

(1) 彼には、王国を【主】に立ち帰らせるチャンスが与えられた。

①もし長老たちの助言に従っていたなら、統一王国は継続した。

②しかし彼は、若い友人たちの助言を採用した。

(2) 年長者が知者で、若者が愚かだということではない。

①問題は、レハブアム自身がソロモンの宮廷で育てられたということである。

②彼には、知恵ある助言を聞き分ける力がなかったのである。

2. 【主】からの裁き

(1) 王国の分裂は、ソロモンの罪に対する【主】からの裁きであった。

①南王国の王レハブアムにもその責任はある。

②北王国は10部族、南王国は2部族(ユダ族とベニヤミン族)からなった。

(2) ヤロブアムは、ダンとベテルに金の子牛を安置した(ヤロブアムの道)。

①それ以降、北王国には19人の王が出現した(9王朝)。

②善王はひとりもない(北王国は一度も【主】に立ち帰らなかった)。

③アッシリヤ捕囚になった。

3. 南王国の存続

(1) 単一王朝で、20人の王が出現した。

- ①その内、8人が善王である。
- ②しかし、民の罪は余りにも深かったため、大勢としては崩壊に向かった。

(2) 【主】が南王国を可能な限り守られたのは、ダビデ契約のゆえである。

- ①歴代誌の記録は、南王国を中心に書かれたものである。

Ⅲ. 南王国の崩壊(13～36章)

1. アサ(14～16章)

(1) 初めは良かった。

- ①偶像を取り除き、【主】に立ち返るように民に命じた。
- ②【主】は、10年間の平和を与えた。
- ③その間、町々を要塞化した。
- ④【主】との契約の更新を行った。
「さらに、彼らは、心を尽くし、精神を尽くしてその父祖の神、【主】を求め、だれでもイスラエルの神、【主】に求めようとしない者は、小さな者も大きな者も、男も女も、殺されるという契約を結んだ」(15:12～13)
- ⑤母マアカを王母の地位から退け、彼女がおがむアシェラ像を焼いた。

(2) 終わりは悪かった。

- ①【主】から心が離れた。
- ②神殿の宝物倉から銀と金を取り出し、アラムの王ベン・ハダデに贈った。
- ③預言者ハナニに糾弾されたが、悔い改めなかった。
- ④両足ともに重病にかかったが、【主】に立ち帰らないで、医者を求めた。

(3) 教訓：初めが良くても、終わりも良いとは限らない。

2. ヨシヤパテ(17～20章)

(1) 南王国で最も偉大な王のひとりである。

- ①神を求めた王である。
- ②祭司たちを派遣し、民にモーセの律法を教えた。
- ③しかし彼は、3つの失敗を犯している。

(2) 第1の失敗は、政略結婚によって北王国との和平を求めたことである。

- ①息子のヨラムを、アハブとイゼベルの娘アタルヤと結婚させた。
- ②アタルヤは、バアル礼拝を南王国にもたらすことになる。
- ③政略結婚が偶像礼拝につながるというのは、ソロモンの時と同じである。

④ヨシャパテは、自らの信仰的な立場を妥協させた。

(3) 第2の失敗は、アハブと同盟を結び、北王国の敵と戦ったことである。

①アハブはヨシャパテに、王服を着て戦場に行くように願った。

②【主】はヨシャパテを守り、アハブが殺されるようにされた。

③罪を犯したが、【主】がヨシャパテ守られたという例外的な事例である。

(4) 第3の失敗は、富を得るために、悪王アハズヤと同盟を結んだこと。

①タルシュシュ行きの船団は、嵐に会って難破した。

②これは、今も信仰者が犯しやすい過ちである。

(5) モアブ人とアモン人の連合軍との戦いにおいては、信仰を発揮した。

①彼は、【主】に信頼した。

②祈り、預言、賛美によって勝利した(20章)。

「それから、彼は民と相談し、【主】に向かって歌う者たち、聖なる飾り物を着けて賛美する者たちを任命した。彼らが武装した者の前に行って、こう歌うためであった。『【主】に感謝せよ。その恵みはとこしえまで』」

(20:21)

(6) 教訓：礼拝は、クリスチャンの武器である。

3. ヨアシュ(23~24章)

(1) 彼は、奇跡の子である。

①祖母のアタルヤは、ダビデの家系に属する者たちを皆殺しにした。

②大祭司ヨダヤは幼子ヨアシュをかくまい、後に王として擁立した。

③メシアの家系を断ち切ろうとする悪魔の意図が背後にある。

(2) 大祭司ヨダヤの影響

①多くの改革を行った。

②特に、神殿の修復が特記すべき事項である。

(3) 大祭司ヨダヤの死後

①ヨアシュは、レハブアムと同じ過ちを犯し、世俗的助言に耳を傾けた。

②彼は、ヨダヤの息子ゼカリヤを殺した。

(4) 教訓：内に神への愛がないなら、霊的指導者がいなくなった時に墮落する。

4. ウジヤ (26章)

- (1) アザルヤとも呼ばれた。
 - ①長期に渡る繁栄を経験した。

- (2) 彼の失敗は、祭司の役割を果たそうとしたこと。
 - ①傲慢が彼を墮落させた。

「ところが、彼は勢力を増すとともに思い上がって墮落し、自分の神、主に背いた。彼は主の神殿に入り、香の祭壇の上で香をたこうとした」 (26:16)
 - ②彼は、重い皮膚病で打たれた。
 - ②王であり祭司であるのは、キリストだけである。

- (4) 教訓：傲慢になると、自分に委ねられていない権威を行使したくなる。

5. ヒゼキヤ (29～32章)

- (1) 王たちの中で最も霊的な人物である。
 - ①神殿を修復した。
 - ②かつてないほどの規模で、真の礼拝を回復した。
 - ③北王国と南王国がいっしょに過越の祭りを守るように呼びかけた。
 - ④国内から偶像を取り除いた。

- (2) アッシリヤのセナケリブの攻撃を受けた。

「これらの誠実なことが示されて後、アッシリヤの王セナケリブが来て、ユダに入り、城壁のある町々に対して陣を敷いた。そこに攻め入ろうと思ったのである」 (32:1)

 - ①この時、ヒゼキヤはトンネルを掘った。

- (3) 教訓：【主】は、ご自身に忠実な人をさらに試される。

6. ヨシヤ (34～35章)

- (1) ヒゼキヤの息子マナセは、南王国で最悪の王である。
 - ①父ヒゼキヤの業績をすべて破壊した。
 - ②晩年になって、マナセは悔い改め、【主】は彼を赦された。
 - ③マナセの息子アモンも悪王で、2年でその統治が終わった。
 - ④続いて、アモンの息子ヨシヤが王となった。

- (2) ヨシヤは8歳で王となり、16歳で【主】を求め始めた。
 - ①偶像を取り除き、種々の改革を行った。
 - ②神殿修復の際に、律法の本を発見した。
 - ③大規模な過越の祭りを行った。

- (3) 彼の失敗は、自分に関係のない戦いにかかわったことである。
 - ①エジプトの王ネコの進行を食い止められると思った。
 - ②ネコはヨシヤに警告(神のことば)を発したが、それは無視された。
 - ③ヨシヤは変装していたが、戦場で矢に当たり負傷する。
 - ④エルサレムに戻り、そこで死ぬ。

- (4) 教訓: 自信過剰になると、自分に関係のないことに首を突っ込みたくなる。

結論:

1. はじめに

- (1) ヨシヤの死後、弱小の王たちのみが登場する。
- (2) 最後の王はゼデキヤである。
- (3) 前586年、南王国はバビロン捕囚になる。

2. 南王国が滅びた原因は何か

- (1) 民が【主】から離れ、偶像を礼拝するようになったことが原因である。
 - ①最初は、偶像礼拝は秘密裏に行われた。
 - *神殿では【主】を礼拝しながら、同時に偶像も礼拝した。
 - ②次に、堂々と【主】を離れ、敵の神々をおがむようになった。

- (2) 善王がもたらした好影響は、長続きしなかった。
 - ①善王がもたらす改革は、外面の改革である。
 - ②内面が変化しない限り、真の霊的再生にはつながらない。

3. 私たちへの適用

- (1) 私たちの成功は、【主】から来るものか、この世との協力から来るものか。
- (2) どのような基準で、クリスチャンとしての成功を判断するのか。
「わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう」(7:14)

60分でわかる旧約聖書(13) 「歴代誌第一」

1. はじめに

(1) 書名

- ①サムエル記、列王記、歴代誌は、それぞれ本来は一書である。
- ②七十人訳が便宜的に第一と第二に分けた。
- ③それ以降、その習慣が定着した(ヘブル語聖書も同様)。
- ④ヘブル語のタイトル:「ディブレ・ハヤミム」
 - *「the words concerning the days」
- ⑤ギリシア語(七十人訳)のタイトル:「パラレイポメナ」
 - *省略という意味
 - *このタイトルは、半分合っているが正解ではない。
- ⑥歴代誌(Chronicles)という書名は、ブルガタ訳(ラテン語)から出ている。

(2) 著者

- ①恐らくエズラであろう(ユダヤ教の伝統)。
- ②用語や文章のスタイルが、エズラ記とネヘミヤ記に似ている。
- ③歴代誌にはエズラ記とネヘミヤ記も含まれていたと思われる。

(3) 内容

- ①ヘブル語聖書の最後の書である。
- ②歴代誌第一の内容は、サムエル記第一と第二に対応している。
- ③歴代誌第二の内容は、列王記第一と第二に対応している。

2. 歴代誌第一のアウトライン

- I. アダムからサウルまでの系図(1~9章)
- II. サウルの治世(10章)
- III. ダビデの治世(11~29章)
 1. ダビデの軍勢(11~12章)
 2. ダビデと契約の箱(13~16章)
 3. ダビデと神殿建設の願い(17章)
 4. ダビデの勝利(18~20章)
 5. 人口調査と疫病(21章)
 6. 神殿建設の準備(22~26章)
 7. 軍事と政治におけるリーダーたち(27章)
 8. ダビデの晩年(28~29章)

3. メッセージのアウトライン

- (1) 再記述の法則とは何か。
- (2) 歴代誌と他の歴史書(サムエル記と列王記)の関係は何か。
- (3) 歴代誌の教訓とは何か。

歴代誌を通して、歴史の中に見られる霊的原則について考える。

I. 再記述の法則とは何か。

はじめに

- (1) 歴代誌は、サムエル記と列王記の複製なのか。
 - ①決してそうではない。歴代誌には、サムエル記や列王記とは別の目的がある。
- (2) それを理解するために、再記述の法則を学ぶ必要がある。

1. 再記述の法則とは

- (1) ひとつの長い記述を終えると、再びその記述に戻り、情報を追加する。
 - ①ある部分を取り上げ、そこに詳細な説明を加える。
 - ②その部分は、聖書記者(聖霊)が重要だと判断している箇所である。
- (2) 二度目の記述は、最初の記述の要約であったり、解説であったりする。
- (3) 歴代誌は、再記述の法則をサムエル記と列王記に適用したものである。
 - ①ある部分はカットされている。
 - ②ある部分は詳細に解説されている。
 - ③歴代誌は、サムエル記と列王記の出来事を別の角度から解釈したものである。

2. 創世記2章

- (1) 創世記1章の7日間の記録の再記述
- (2) 創2:4a

Gen 2:4 これは天と地が創造されたときの経緯である。

- (3) 創世記2章は、ひとつのテーマにズームインする。
 - ①人類の創造
 - ②この情報は、私たちにとって極めて重要である。
 - ③人類は、アダムの子孫である。

3. 申命記

- (1) モーセの律法の繰り返しではない。
- (2) 40年の荒野の放浪生活を前提に、モーセの律法を解釈したものである。

II. 歴代誌と他の歴史書(サムエル記と列王記)の関係は何か。

1. 歴代誌は他の歴史書の再記述である。
 - (1) 歴代誌第一の強調点はダビデであり、第二の強調点はダビデの子孫である。
 - (2) 祭壇という視点から書かれた歴史 vs. 王座という視点から書かれた歴史
 - (3) 神殿を中心に書かれた歴史 vs. 王宮を中心に書かれた歴史
 - (4) 宗教的歴史 vs. 政治的歴史
 - (5) 祭司の視点 vs. 預言者の視点

2. 歴代誌は、いくつかの重要な出来事を省略している。
 - (1) 南北分裂以降、北王国(イスラエル)の歴史はほとんど無視されている。
 - ① 歴代誌の記録は、南王国に焦点を合わせている。
 - (2) ダビデとサウルの葛藤
 - ① ダビデは、ゆえなくサウル王に追われた。
 - (3) サウルの息子イシュ・ボシェテとの争い
 - ① 歴代誌は、政治的歴史からは距離を置いている。
 - (4) ダビデの罪を取り上げていない。
 - ① バテ・シェバとの関係とウリヤ殺害の罪
 - ② ダビデの家庭内の問題(アムノンとアブシャロム)
 - (5) アドニヤの野望
 - ① 王位継承を狙う。
 - (6) ソロモンの罪

3. 歴代誌は、いくつかの出来事を強調している。
 - (1) ダビデ、ダビデの子孫によるエルサレムからの統治
 - (2) 王国の南北分裂は、ソロモンの罪の結果ではなく、ヤロブアムの政治的野心の結果である。
 - (3) ダビデとソロモンが、ほとんど理想化されている。
 - ① ダビデは、神殿建設のための資材を用意した。
 - ② ダビデは、賛美と楽器を用意し、祭司やレビ人の組織化を行った。
 - ③ ソロモンは神殿を建設した。

III. 歴代誌の教訓とは何か。

1. 歴史は、神が働かれたことの記録である。

- (1) 歴史上の出来事は、それ自体が啓示であり、神の御業の結果である。
- (2) それらの出来事の意味を理解するためには、解釈が必要である。
- (3) 解釈もまた啓示によって得られる。

2. 歴代誌は、歴史的出来事を解釈した書である。

- (1) 多神教の民には、このような解釈は与えられない。
- (2) 彼らは、歴史上の出来事の意味を自分で判断するしかない。
- (3) 歴代誌は、イスラエルの民に与えられた歴史的出来事の解釈である。
- (4) 歴史は一般啓示であり、解釈は特別啓示である。

3. 歴代誌は、契約の民にいくつかの霊的教訓を教えた。

- (1) 民が従順であれば、神は彼らを祝福する。
- (2) 民が不従順であれば、罰し、訓練する。
- (3) 神の忍耐が尽きた時、南王国ユダはバビロン捕囚を経験した。
- (4) 神は、敵が神殿と町を破壊することを許された。
- (5) 歴代誌の最後は、ユダヤ人の祖国帰還を許可するクロス王の勅令で終わる。
- (6) そこからエズラ記へと続く。
- (7) 人が罪を犯しても、神の計画は継続していく。

4. ダビデの罪とソロモンの罪がカットされている。

- (1) 神はダビデの罪を赦された。
- (2) 神が罪を赦すとき、神はその罪を忘れてくださる。
- (3) **ヘブ 8:12**

「なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである」

- (4) **エレ 31:34**

「そのようにして、人々はもはや、『【主】を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。

——【主】の御告げ——わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ」

- ①新しい契約は、アブラハム契約の成就である。
- ②神とイスラエルの民の間の契約である。
- ③しかし、アブラハム契約の中には最初から異邦人の救いが約束されている。
- ④「罪を思い出さない」という約束は、私たち異邦人のものでもある。

60分でわかる旧約聖書(12) 「列王記第二」

1. はじめに

(1) 書名

- ①サムエル記、列王記、歴代誌は、それぞれ本来は一書である。
- ②七十人訳が便宜的に第一と第二に分けた。
- ③それ以降、その習慣が定着した(ヘブル語聖書も同様)。

(2) 内容

- ①列王記は、サムエル記の続編である。
- ②列王記が2分されたのは、内容上の理由ではなく、物理的理由である。
- ③単なる歴史ではなく、歴史からの教訓(歴史観)を教えようとしている。

2. アウトライン

- I. ダビデの晩年(1列1~2章)
- II. ソロモンの統治(1列3~11章)
- III. 分裂王国(1列12~2列16章)
 1. 列王記の大前提
 2. ソロモンの失敗
 3. 統一王国の分裂
- IV. 北王国の崩壊(2列17章)
 1. 金の子牛
 2. 下剋上の時代
 3. 北王国崩壊の原因
- V. 南王国の崩壊(2列18~25章)
 1. ダビデ王朝の継続
 2. 捕囚前のイザヤの活躍
 3. 捕囚期のエレミヤの活躍
 4. まとめ

3. 結論

- (1) 地上の王国と天の王国
- (2) 人の計画と神の計画

列王記第二を通して、歴史の中に見られる霊的原則について考える。

Ⅲ. 分裂王国(1列12~2列16章)

1. 列王記の大前提

(1) 創12:1~3

Gen 12:1 【主】はアブラムに仰せられた。／「あなたは、／あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、／わたしが示す地へ行きなさい。

Gen 12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、／あなたを祝福し、／あなたの名を大いなるものとしよう。／あなたの名は祝福となる。

Gen 12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、／あなたをのろう者をわたしはのろう。／地上のすべての民族は、／あなたによって祝福される。」

- ①土地の約束
- ②子孫の約束
- ③祝福の約束

(2) 出19:4~6

Exo 19:4 あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを鷲の翼に載せ、わたしのもとに連れて来たことを見た。

Exo 19:5 今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。

Exo 19:6 あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。／これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである。」

- ①イスラエルの民は、神の支配の下で生きるなら祝福を受ける。
- ②イスラエルの民は、祭司の王国、聖なる国民である。

(3) イザ42:6

Isa 42:6 「わたし、【主】は、／義をもってあなたを召し、／あなたの手を握り、／あなたを見守り、／あなたを民の契約とし、国々の光とする。

- ①イスラエルの民は、「国々の光」である。
- ②異邦人諸国を神に導く光となる。

(4) イスラエルの民は、この使命を果たすことができたのか。

- ①列王記は、失敗の歴史である。
- ②その原因は、モーセの律法に対する不従順である。

2. ソロモンの失敗

(1) 政略結婚により、偶像礼拝が蔓延した。

①1列11:3~4

1Ki 11:3 彼には妻たち、すなわち七百人の王妃と三百人の側室がいた。この妻たちが彼の心を迷わせた。

1Ki 11:4 ソロモンが老境に入ったとき、彼女たちは王の心を迷わせ、他の神々に向かわせた。こうして彼の心は、父ダビデの心とは異なり、自分の神、主と一つではなかった。

②モーセの律法からの逸脱である。

(2) ソロモンの罪に対する裁き

①ソロモンの死後、裁きが下った。

②ダビデ契約のゆえに、ソロモンの王国は守られた。

3. 統一王国の分裂

(1) ユダ族とエフライム族の対立

①レハブアムとヤロブアムの対立

(2) 南北に分裂

①北王国=イスラエル

②南王国=ユダ

③北の10部族は、ヤロブアムが王となって統治した。

④南の2部族は、ダビデ、ソロモンの子孫たちが王となって治める。

*ダビデの家が退けられることはない。

IV. 北王国の崩壊(2列17章)

1. 金の子牛

(1) ヤロブアムは、ダンとベテルに神殿を築き、金の子牛を安置した。

①「ネバテの子ヤロブアムの道」と呼ばれた。

②これは、ヤハウエ礼拝の変形である。

③北の10部族をエルサレムに上らせないための苦肉の策である。

2. 下剋上の時代

(1) 約210年の間に、19人の王が出現した。

①9王朝が興亡を繰り返した。

②最後は、アッシリヤ捕囚となる(前721)。

(2) 預言者エリヤとエリシャの活躍

- ①バアル礼拝との戦い
- ②出エジプトの時代に続いて、奇蹟が起こる時代となった。
- ③預言者の語ったメッセージは、申命記の原則への回帰である。
- ④エリヤの時代に、「イスラエルの残れる者」という概念が誕生した。
- ⑤1列19:18

1Ki 19:18 しかし、わたしはイスラエルの中に七千人を残しておく。これらの者はみな、バアルにひざをかがめず、バアルに口づけしなかった者である。」

- ⑤これは、ロマ11章でパウロが取り上げる概念である。

3. 北王国崩壊の原因

(1) 2列17:22~23

2Ki 17:22 イスラエルの人々は、ヤロブアムの犯したすべての罪に歩み、それをやめなかったのもので、

2Ki 17:23 ついに、【主】は、そのしもべであるすべての預言者を通して告げられたとおり、イスラエルを御前から取り除かれた。こうして、イスラエルは自分の土地からアッシリヤへ引いて行かれた。今日もそのままである。

- ①アッシリヤ捕囚の原因は、モーセの律法に対する不従順である。

V. 南王国の崩壊(2列18~25章)

1. ダビデ王朝の継続

(1) 南王国には20人の王が出現した。

- ①アタルヤという女帝以外は、すべてダビデの血統であった。
- ②彼女は、ダビデ家を抹殺しようとして王位継承権のある者たちを暗殺する。
- ③幼子ヨアシュだけが助かった。

(2) 単一王朝(ダビデ王朝)がバビロン捕囚(前586年)まで継続する。

- ①南王国の王の内、8人が名君(善王)であった。

2. 捕囚前のイザヤの活躍

(1) シャカイナグローリーを目撃した。

(2) アッシリヤとの戦争に備えるアハズ王を激励した。

- ①イザ7:14

Isa 7:14 それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。

- ②「アルマー」(未婚の乙女)
- ③「ベツラー」(処女)

(3) メシア受難の預言を語った。

- ①イザヤ53章

3. 捕囚期のエレミヤの活躍

(1) エレミヤの手紙

- ①エレ29:4~10

②捕囚民への4つの原則

- *家を建てて住み着く。
- *畑を作ってその実を食べる。
- *結婚し子を残す。
- *その町の繁栄を求める。

③これは、ユダヤ人の世界離散への備えとなった。

(2) エレ31:31~34

Jer 31:31 見よ。その日が来る。——【主】の御告げ——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。

Jer 31:32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。——【主】の御告げ——

Jer 31:33 彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——【主】の御告げ——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

Jer 31:34 そのようにして、人々はもはや、『【主】を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。——【主】の御告げ——わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」

- ①「契約の民」との契約
- ②聖霊により心に記される契約
- ③新しい契約をもたらすのがメシアである。

4. まとめ

(1) 出エジプト(解放)から始まった歴史は、バビロン捕囚(束縛)で終わった。

- ①列王記はダビデ王で始まり、バビロンの王で終わった。

(2) メシア登場の舞台が完成した。

①メシアは、アブラハム契約を成就するお方として登場する。

結論：

1. 地上の王国と天の王国

(1) 各王が、モーセの律法の基準、ダビデ王の基準に従って評価される。

①列王記は、単なる事実の羅列ではなく、霊的教訓を教えるための書である。

②祝福を受けるためには、天の王国の基準で統治する必要がある。

(2) この原則は、クリスチャン生活にも適用される。

①ヨハ 15 : 11

Joh 15:11 わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにある、あなたがたの喜びが満たされるためです。

②イエスの命令に従うことが、喜びに満たされる方法である。

③世の人たちは、神を排除することによって喜びが得られると思っている。

2. 人の計画と神の計画

(1) イスラエルの民の失敗は、メシアの誕生をもたらす。

(2) モーセの律法が機能しなかったため、新しい契約が結ばれる。

(3) イスラエルがメシアを拒否したため、異邦人に救いがもたらされた。

(4) やがてイスラエルはみな救われる。

60分でわかる旧約聖書(11) 「列王記第一」

1. はじめに

(1) 書名

- ①サムエル記、列王記、歴代誌は、それぞれ本来は一書である。
- ②七十人訳が便宜的に第一と第二に分けた。
- ③それ以降、その習慣が定着した(ヘブル語聖書も同様)。
- ④約600年後にヒエロニムスがブルガタ訳(ラテン語訳)を完成させた。
 - *列王記という名称は、ヒエロニムスによる命名である。
 - *サウルを除くすべての王たちが登場する書である。

(2) 作者

- ①バビロン捕囚の記録があるので、捕囚期に活躍した人物が上げられている。
- ③エレミヤ、エズラ、エゼキエルなど。

(3) 内容

- ①列王記は、サムエル記の続編である。
- ②列王記が2分されたのは、内容上の理由ではなく、物理的理由である。
- ③単なる歴史ではなく、歴史からの教訓(歴史観)を教えようとしている。

2. アウトライン

I. ダビデの晩年(1:1~2:11)

- 1. 王位を狙うアドニヤ(1:1~38)
- 2. 油注ぎを受けるソロモン(1:39~53)
- 3. ダビデの最後の言葉(2:1~11)

II. ソロモンの統治(2:12~11:43)

- 1. 政敵の排除(2:12~46)
- 2. ソロモンの知恵(3章)
- 3. ソロモンの栄華(4章)
- 4. ソロモンの神殿(5~8章)
- 5. ソロモンの名声(9~10章)
- 6. ソロモンの背教と死(11章)

3. 結論

(1) ダビデのリーダーシップ

(2) 王たちと預言者たち

列王記第一を通して、歴史の中に見られる霊的原則について考える。

I. ダビデの晩年(1:1~2:11)

1. 王位を狙うアドニヤ(1:1~31)

(1) 2サム5:4によれば、ダビデはおよそ70歳で死んだ。

- ①彼の晩年は、肉体的には非常に弱くなった。
- ②美しい娘を寝床にはべらせて王の体を温めた。
- ③王の死が近づくと、王位継承問題が起こってくる。

(2) 四男のアドニヤが、事前工作を開始した。

- ①彼は、生存するダビデの息子たちの中では最年長である。
- ②父が存命中に、自分が王になろうと心に決めた。
- ③彼は、戦車、騎兵、50人の衛兵を手に入れた。民の歡心を買うためである。
- ④父ダビデの心とは正反対である。
- ⑤父から受けるべき叱責や訓練を受けないままで大人になった人物である。

(3) イスラエルにおける王位継承法

- ①神が王を選ぶ。
- ②それを預言者が民に伝える。
- ③サウルもダビデも、自分から王になることを求めたわけではなかった。
- ④若き日の野心や思い上がりは、なんの益にもならない。

(4) ナタンとバテ・シェバの工作

- ①彼らは、協力してダビデに進言する。
- ②ダビデは、ただちに決断を下す。

2. 油注ぎを受けるソロモン(1:32~53)

(1) ギホンの泉での油注ぎ

- ①王からの承認、神からの承認、軍からの承認(ベナヤの賛同)を得た。
- ②民はこぞって、「ソロモン王。ばんざい」と叫んだ。
*「Long live!」。王がいつまでも統治されるようにという意味。
- ③アドニヤは寛容な扱いを受けた。

(2) 好スタートを切るソロモン

- ①サウルとダビデは、油注ぎの後、民衆の支持を勝ち取る必要があった。

- ②また、最初から12部族すべてを統治したわけではなかった。
- ③ソロモンは、民衆の熱狂的な支持の中で王となった。
- ④最初から12部族全体を治めることになった。
- ⑤神がダビデに約束した計画が実現し始めた(ダビデ契約。2サム7:7~17)。
- ⑥神の御心に基ついて物事が進められる時、国は栄える。

3. ダビデの最後の言葉(2:1~11)

(1) 神との関係

- ①モーセの律法への従順こそ、【主】から祝福を受ける方法である。
- ②従順は2つの祝福をもたらす。
 - *ソロモンの治世に祝福をもたらす。
 - *ダビデ王朝全体に祝福をもたらす。

(2) 人との関係(3組の人物の処置をソロモンに委ねた)

- ①将軍ヨアブは危険人物である。
 - *無実の人の血を流した。
- ②ギルアデ人バルジライの子らには、祝福が約束された。
 - *アブシャロムの謀反の際に、ダビデを助けた。
- ③ベニヤミン人ゲラの子シムイも危険人物である。
 - *ダビデに対して呪いの言葉を吐き、ダビデの命まで狙った。

(3) 統治の最初の段階で、ソロモンには以上のような難題が課された。

- ①彼が神の知恵と「聞き分ける心」(3:9)を必要としたのは、当然である。
- ②複雑な人間関係の中で生きている私たちにも、神からの知恵が必要である。

II. ソロモンの統治(2:12~11:43)

1. 政敵の排除(2:12~46)

(1) アドニヤ死

- ①彼は、シュネム人の女アビシャグを妻にしたいと願った。
- ②彼女は、ダビデの最後の側室である。
- ③ソロモンはアドニヤを処刑した。

(2) 祭司エブヤタルの罷免

- ①彼は、アドニヤに加担した。

(3) ヨアブの処刑

- ①祭壇の角をつかんだ。
- ②祭壇の角は「逃れの場」であるが、殺人者にはこの規定は適用されない。

(4) シムイの処刑

- ①命令違反を理由に、3年後に処刑される。

2. ソロモンの知恵(3章)

(1) 3:5

1Ki 3:5 その夜、ギブオンで【主】は夢のうちにソロモンに現れた。神は仰せられた。「あなたに何を与えようか。願え。」

- ①この顕現は、王位継承と政敵の排除を、神が受け入れたということを示す。
- ②さらに、ソロモンが忠実に歩んでいるので、神がダビデ契約の祝福を彼に与え始めたことをも示している。

(2) 3:10

1Ki 3:9 善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければ、だれに、このおびただしいあなたの民をさばくことができるでしょうか。」

- ①ソロモンが統治しようとしている民は、偉大な民である。
- ②アブラハム、モーセ、ヨシュア、サムエル、ダビデなどが導いてきた民。
- ③しかもその民は、人口が急速に増加しつつある。
- ④彼は、従来の統治法では新時代を乗り切ることができなと感じていた。
- ⑤そこで、「聞き分ける心をしもべに与えてください」と神に願った。
 - * 「聞き分ける心」とは、神の御心を聞き分け、善悪を判断する心。
 - * 「聞く」とは「従う」ことである。

(3) 3:11~13

1Ki 3:11 神は彼に仰せられた。「あなたがこのことを求め、自分のために長寿を求めず、自分のために富を求めず、あなたの敵のいのちをも求めず、むしろ、自分のために正しい訴えを聞き分ける判断力を求めたので、

1Ki 3:12 今、わたしはあなたの言ったとおりにする。見よ。わたしはあなたに知恵の心と判断する心とを与える。あなたの先に、あなたのような者はなかった。また、あなたのあとに、あなたのような者も起こらない。

1Ki 3:13 そのうえ、あなたの願わなかったもの、富と誉れとをあなたに与える。あなたの生きているかぎり、王たちの中であなたに並ぶ者はひとりもないであろう。

- ①ソロモンに、知恵の心と判断する心が約束された。
 - *ソロモンは先にも後にも例を見ないほどの名君となった。
- ②ソロモンには、富と誉れも約束された。
 - *これは、民を統治するための強力な武器となった。
 - *ソロモンが願わなくても、神は彼に必要なものを知っておられた。

(4) ソロモンの知恵の例

- ①ふたりの遊女の訴え
- ②生きている子を2つに断ち切り、両方が半分ずつ取るように命じた。
- ③生きている子を相手に与えてくださいと言った方が、実の母である。

3. ソロモンの栄華(4章)

(1) 高官たちの任命

- ①ソロモン内閣の組閣にも、知恵が現れている。
- ②11名の高官の名前が上げられている。適材適所
- ③王国確立に功のあった者たちに報いている。

(2) 12の行政区

- ①それぞれの行政区に、守護(行政官)を任命した。
- ②彼らに、徴税の任務を課した。
- ③それぞれの守護は、毎月交代で税を納めた(食料を納めた)。
- ④王宮の食料の消費量は膨大なものであった。
- ⑤12部族の境界線とは異なる区分。部族間の敵対感情を和らげた。
- ⑥行政区の広さは異なる。能力に応じて行政区を割り当てた。

(3) 繁栄のしるし

- ①人口の増加
- ②豊かな食糧
- ③周辺諸国からの貢物
- ④宮廷の人数
 - *1万4千~3万2千人まで幅広い推定数がある。
 - *「王による重税策と徴兵策」の労苦が見え始める。

(4) 百科辞典的知識と知恵

- ①ソロモンの名声を聞いて、周辺諸国から多くの人たちが訪ねてきた。

4. ソロモンの神殿(5~8章)

(1) ツロの王ヒラムからの使者

- ①この好機を捉え、ソロモンは神殿建設の準備を開始する。
- ②神殿建設の動機は、神へのお礼でも、政治力の誇示でもない。
- ③彼は、ダビデ契約の内容を知っていた(2サム7:12、13参照)。
- ④ソロモンの動機は、神学的なものであった。
- ⑤ソロモンは、ヒラムと契約を結ぶ。

(2) 強制労働

- ①イスラエル人の役務者3万人を強制徴用した。
 - *3つの組に分かれ、1か月交代で、ツロで労働に従事した。
 - *民衆の不満を和らげる政策である。
- ②非イスラエル人の役務者は18万3,300人いた。
- ③ソロモンの政策にはある種の危険性が伴っている。

(3) 神殿の建設

- ①即位して4年目に神殿建設に着手した。
- ②石材の加工は事前に行われ、工事現場では、組み立てだけが行われた。

(4) 神殿建設中の【主】のことば

- ①成功には落とし穴がある。
- ②神からの励ましと警告のことば(6:12~13)

1Ki 6:12 「あなたが建てているこの神殿については、もし、あなたがわたしのおきてに歩み、わたしの定めを行い、わたしのすべての命令を守り、これによって歩むなら、わたしがあなたの父ダビデにあなたについて約束したことを成就しよう。

1Ki 6:13 わたしはイスラエルの子らのただ中に住み、わたしの民イスラエルを捨てることはしない。」

- ③この約束の成就是、いかに神との契約関係に忠実に歩むかにかかっている。
- ④どんなに偉大な王であっても、不信仰に陥れば、王座から退けられる。

(5) 神殿の描写

(6) 神殿の奉献

- ①8章は、列王記全体の中で最も重要な章で、神学的意味に満ちている。
- ②神殿奉献式の実質的な内容は、契約の箱の至聖所への搬入である。
- ③契約の箱の中には、律法を記した2枚の石板が収められていた。

*マナを入れた金の壺と芽を吹いたアロンの杖はなかった。

④2枚の石板は、神とイスラエルの民の契約関係を象徴していた。

(7) 8:10~11

1Ki 8:10 祭司たちが聖所から出て来たとき、雲が【主】の宮に満ちた。

1Ki 8:11 祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかった。【主】の栄光が【主】の宮に満ちたからである。

①神は、この神殿を受け入れた。

②古いものは新しいものに置きかわったが、至聖所の中に神が臨在されるという真理は変わらない。

③神は契約の民とともに歩まれる。

5. ソロモンの名声(9~10章)

(1) 建設事業

①エルサレムの城壁の補強

②要塞の建設(ハツオルとメギドとゲゼル)

(2) ソロモンの船団

①アカバ湾に船団を設け、海洋交易を行った。

(3) シェバの女王の訪問

①シェバとはイエメンのことである。

②ソロモンの名声を試すため(ゲームのようなもの)

③実利的な目的

④大いに驚く女王

6. ソロモンの背教と死(11章)

(1) 多くの妻たち

①王妃としての妻が700人、そばめが300人いた。

②その妻たちが、ソロモンの心を【主】から偶像神に向けさせた。

③晩年のソロモンは、ダビデの心とは大きく異なった心を持つようになった。

④ソロモンは信仰を捨てたのではない。

⑤【主】以外に、妻たちがもたらした偶像神をも礼拝するようになった。

(2) 偶像神

①アシュタロテは、シドン人たちが礼拝していた豊穡と性の女神。

- ②ミルコムは、人身供養で悪名高いアモン人の偶像神。
- ③モアブ人の偶像神ケモシュと、アモン人の偶像神モレク(ミルコムの別名)のために、オリーブ山の上に高き所(祭壇)を築いた。

(3) 失敗の原因

- ①ソロモンの偉大さは、【主】から与えられたものである。
- ②【主】から離れ、自らの使命を忘れたとき、ソロモンは背教の王になった。
- ③ソロモンは、内憂外患の中で死んでいく。

(4) 11:32~33(預言者アヒヤがヤロブアムに預言する)

1Ki 11:32 しかし、彼には一つの部族だけが残る。それは、わたしのしもべダビデと、わたしがイスラエルの全部族の中から選んだ町、エルサレムに免じてのことである。

1Ki 11:33 というのは、彼がわたしを捨て、シドン人の神アシュタロテや、モアブの神ケモシュや、アモン人の神ミルコムを拝み、彼の父ダビデのようには、彼は、わたしの見る目にかなうことを行わず、わたしのおきてと定めを守らず、わたしの道を歩まなかったからである。

- ①王国が完全に滅びない理由は、ダビデ契約にある。
- ②罪には裁きが下る。

結論:

1. ダビデのリーダーシップ

- (1) ダビデは、恐ろしい罪を犯したこともあったが、基本的には神に忠実に歩んだ。「それはダビデが【主】の目にかなうことを行い、ヘテ人ウリヤのことのほかは、一生の間、主が命じられたすべてのことにそむかなかったからである」(1列15:5)
- (2) 列王記の視点から考えると、ソロモンを後継者に選んだことが最も重要な出来事である。
- (3) ダビデのリーダーシップは、ソロモンだけでなく、それ以降のすべての王たちにとって、見習うべきモデルとなった。
- (4) ダビデの統治が、それ以降の王たちの統治を評価する基準となった。

①ヤロブアムに関する評価

「…ダビデの家から王国を引き裂いてあなたに与えた。あなたは、わたしのしもべダビデのようではなかった。ダビデは、わたしの命令を守り、心を尽くしてわたしに従い、ただ、わたしの見る目にならなかったことだけを行った」(1列14:8)

②アサに関する評価

「アサは父ダビデのように、【主】の目にかなうことを行った」(1列15:11)

③アマツヤに関する評価

「彼は【主】の目にかなうことを行ったが、彼の父祖、ダビデのようではなく、…」
(2列14:3)

④アハズに関する評価

「アハズは二十歳で王となり、エルサレムで十六年間、王であった。彼はその父祖ダビデとは違って、彼の神、【主】の目にかなうことを行わず、」(2列16:2)

2. 王たちと預言者たち

(1) 王たちは、神からの委託を受けた統治者である。

- ①アブラハム契約、シナイ契約、ダビデ契約が生きている。
- ②神の御心に歩めば、個人的にも国家としても、祝福を受ける。
- ③いくら神から特権を受けていても、神の御心の不従順になれば裁きを受ける。

(2) 預言者たちは、不従順になった王たちを矯正する役割を担った。

- ①彼らが王たちに語った内容は、申命記の原則への回帰である。
- ②悔い改めで神の御心に立ち帰るなら、祝福が待っている。

(3) 神によって創造された世界は、道徳的・倫理的世界である。

- ①歴史は、罪に対する神の裁きの記録である。